

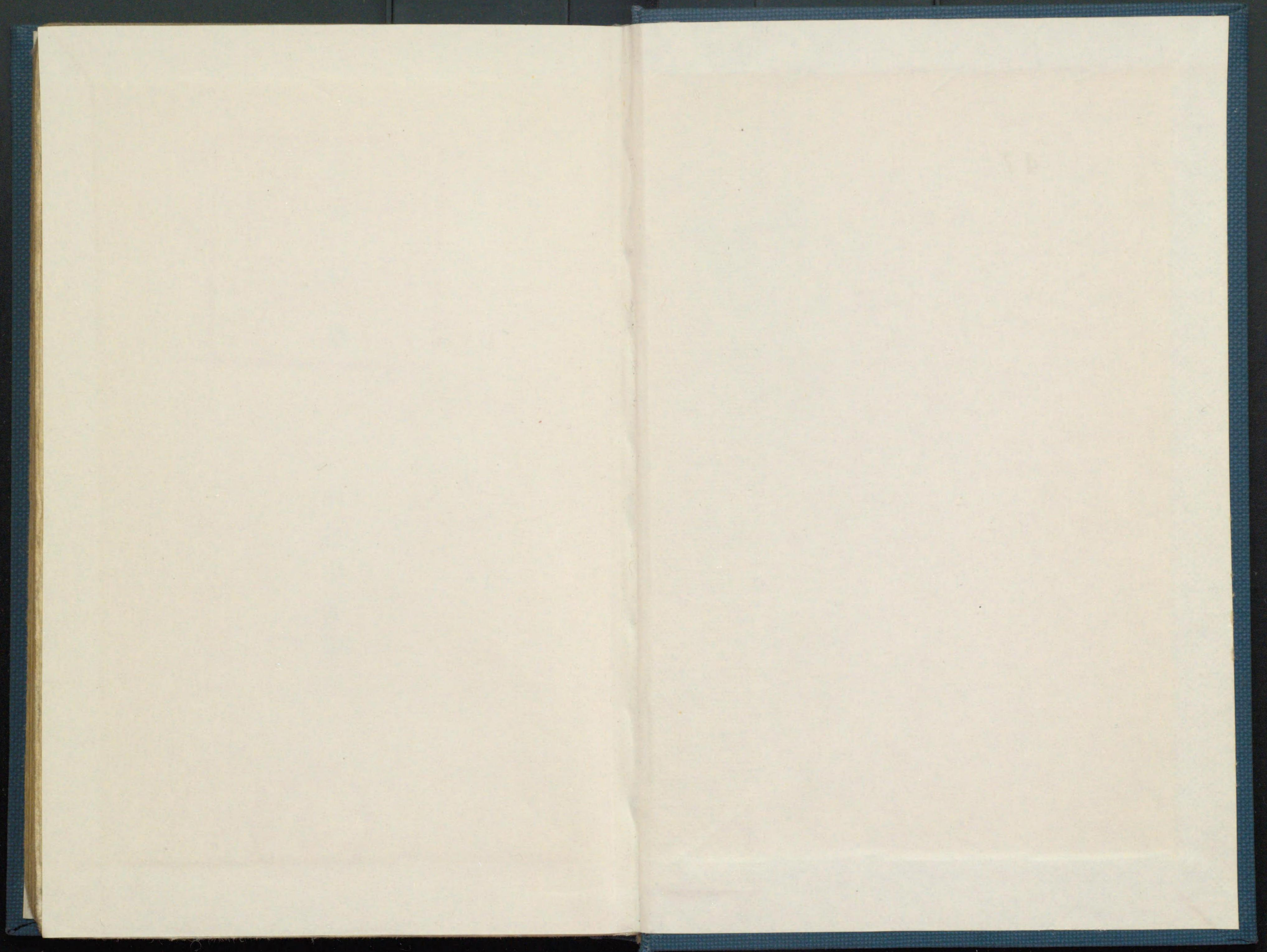
734-203



1200501590673









275084



中  
谷  
字  
吉  
郎





734  
203 1

續  
冬  
の  
華





續冬の華 目次

第一部

眞夏の日本海	一
ツーン湖のほとり	一七
北海道の夏	三三
十勝の朝	四四
伊東雑記	五九
珍らしい偶然の話	六八
大謀網	八八
温泉	一〇三
民族的記憶の名残	一二九
Sの話	一三五

第二部

語呂の論理	一三三
鼠の湯治	一八三
兎の耳	一九七
清々しさの研究の話	二三二
地球の圓い話	二四七
映畫を作る話	二六五
霜柱と凍上の話	二九九
缺航	三五五
生活の實驗	三五三
雪後記	三六五

中谷宇吉郎自裝版



第

一

部

A faint, large rectangular grid or table structure is visible on the right page of the notebook. The grid consists of approximately 10 columns and 10 rows, forming a large square area. The lines are very light and the grid is mostly empty.



眞夏の日本海



此の十年餘り、海といへば太平洋岸の海しか見てゐないのであるが、時々子供頃の毎年親しんだ日本海の夏の海を思ひ返して見ると、非常に美しかったといふ思ひ出が浮んで来る。

日本海の沿岸には一般に砂丘がよく發達してゐる。浪打ち際から眞白な砂が數丁も續いて小高い丘になり、その丘を越えたあたりから松林になつてゐるのが普通である。そしてその松林を抜けた所に初めて漁村が見えることが多い。それといふのは、冬の日を海が一つ荒れて来ると、數丁も續いた砂丘の上まで

浪が押し寄せて来るので、とても海邊の近くに家などを構へてゐることは出来ないものである。



渚に沿つてたどつて見ると、そのやうな眞白な砂丘が暫く續いて懸て小さい岬につくことが多い。その岬は大抵の場合は軟質の岩からなつてゐて、冬の荒浪に段々根本を洗ひ去られて、恐ろしい斷崖になつてゐる。そしてさういふ岬が半里毎位に突き出てゐる所では、その間が小さい入江になつて、眞白な砂濱が弓なりに静かな青い夏の海をふちどつてゐるのに屢々出會ふのである。岬の端には大抵きまつたやうに、盆栽風な枝振りの松が孤立して立つてゐて、あとは黒く續いた松林になつてゐる。

中學の頃夏休みになると、よくかういふ入江に近い漁村の一間を借りて、數人の友達と日本海の夏を送つたものである。此の頃のやうに入學試験の準備などに追はれる心配もなく、毎日のやうに朝飯をすますと、もう眞ぐに魚刺ヤサと水眼鏡とを持つて海へ出かけて行くことに決つてゐた。松林を過ぎると、眞白な砂濱が朝の強い日光を受けて目ばゆい許りに映えてゐて、その向ふに、海が文

字通りに紺碧に輝いて見えるのである。夏の日本海の朝の色位美しい海の色は其の後見たことがない。油繪具のウルトラマリンを生そのままで力強く塗つたやうな濃い色彩である。もつとも色の濃さからいへば、印度洋の航海の間には随分濃い海の色も見た筈であるが、眞白な砂丘の向ふに見える眞夏の日本海の色のやうな印象は残つてゐない。

もつとも午後になると、此の色はすつかりあせて了ふのであつて、今から考へて見ると、どうもあの夏の日本海の朝の色を支配する一番大切な要素は、太陽の位置ではないかといふ氣がする。もつとも海の色をきめる要素は澤山あつて、海水の中に含まれてゐる微粒の塵やうのものに支配されることが多いのであるが、朝風のあとまだ海が比較的澄んでゐる時に、丁度太陽を背にして眺められるといふことが、朝の日本海の色を益々鮮かにするのであらう。

間借りをしてゐる漁師の家から三丁位行くと小さい岬がある。そのあたりは



一面の岩海で、岬の突端からほんの少し離れて小さい岩の島がある。その島の周りが吾々の漁場であつて、章魚とかさごと榮螺とが主な穫物であつた。毎日のやうに漁師の子供たちが大勢で追つ馳け廻してゐるにも拘らず、魚たちもそのあたりが好きと見えて、穫物はいつまでも盡きなかつた。海水浴に就いての衛生的注意などが學校でされてゐたのかも知れないが、そんなことはすつかり忘れて了つて、朝から夕方晩くまで水に浸つて居るやうなことが多かつた。吾々町の子供たちも一週間もすると、もうすつかり海に馴れて了つて、半日位夢中になつて章魚やかさごとを追つてゐた。

そのあたりは浪打ち際から一丁位沖まで、平らな岩礁があつて、深さは大體二尋から三尋位であつた。所々には背の立つやうな浅い所もあつた。岩質は何であつたか忘れて了つたが、顔を水につけながら海面にばかりと浮いて下を覗くと、岩礁が紫がかつた薄黄色に光つて、所々に名も知れない雑多な藻がゆら

いでゐた。岩には上から見ると一面に海綿のやうな穴が澤山あつた。二三度大い呼吸を呼吸して、最後の息を八分位靜かに呼き出したところでぐつと潜る。一尋位沈むと急に海水が冷々と身體に感せられるので、少し氣味が悪いが思ひ切つて潜つて行く。そして底に着くと、左の手で岩の手がかりを押へて身體を水平にする。初めのうちは身體が浮いて困るのであるが、馴れて來ると割合樂に全身が海の底にびたりと着くやうになる。さういふ姿勢で左の手で次から次と岩角をつかみながら、岩礁の上を這つて、小さい穴の一つ一つを覗いて行くのである。勿論右手には魚刺を持つてゐるので、それも漁師に教はつて金具に近い所をつかんでゐるのである。

底に潜つて見ると、景色がまたまるで違ふ。岩の色は緑がかつた土黄色に見え、海藻は薄茶色になる。そして多分海の表面の小さい波で強い夏の日光が屈折される爲だらうが、強い金色の光の縞がゆらぐ藻の上を滑かに動いてゐる。



穴を覗いて行くと、よく海膽<sup>うに</sup>が一つか二つ紺紫色の姿を見せてゐることがある。そして稀には榮螺が同居して居ることもある。あのあたりの海では大抵の場合、榮螺はきまつたやうに海膽と一緒に棲んで居るやうな氣がしたが、偶然なのか、或は何かさういふ習性があるのか、いつか動物の先生にきいて見たいと思ひながらそれ切りになつてゐる。

二つ三つ穴を覗いて行くうちに息が苦しくなるので、足で岩を蹴るやうにして浮き上つて来る。何かの調子でばんやり浮いて来ると、僅か一尋位の所でも、海面まで出るのにひどく長い時間がかかるやうな氣がすることがあつた。青みがかつた牛乳色の水面が上の方にあつて、息が苦しくなつて来ると、何だかその水面が自分の頭の上で渦を巻いてるやうな形に見えた。そんな時にあせつて手足をもがくと却つて遅くなるので、靜かに身體を垂直にして居ると、すぼりと容易く頭が水面を突き抜けるやうな形に浮き上るといふことも、間もなく呑

み込むことが出来た。

穴を覗いて行くうちに、かさごに出會ふことがよくあつた。少し薄暗く見える奥の方に、あの大きい頭ときよとんと前に向いた二つの大きい眼とを見ると、思はず緊張する。運よく息がまだ續く時で、最初の緊張のとたんに魚刺をふるつた場合は時々は巧く行つた。然し少し大きい魚の時など、慎重を期して一度浮び上つて息をととのへて又潜つたりすると大抵は失敗した。魚を突くのは本當の氣合もので、見つけてから一度落付いて靜かに安全な所まで近寄つてなどといふ風に、一寸氣を抜いたら大抵は逃して了ふやうだつた。こちらが餘裕をつけてゐる間に、魚の方も一寸身體を動かして、待機の姿勢といふかたちになつて待つてゐる。さうなつたらとても吾々の手には負へぬのである。

章魚はなか／＼漁れなつた。島の根本の深く剝られた岩洞の奥には澤山居るらしかつたが、其處へはとても潜り込む勇氣はなかつた。深さからいつたら、



大抵は奥行五尺位の簡単な洞穴だったが、奥の方を覗いて見ると、眞暗なやうな氣がして、それに水の色が妙に濃く碧玉色に澄んでゐて、潜り込んだら最期身體が岩洞の天井に吸ひつけられさうな氣がした。勿論さういふ岩洞は遠くから見ただけで失禮して、島の根本を半ば潜りながら周つて行く。すると稀には小さい穴の底から、藻と章魚の足とがもつれあつてゆらくとなびき出てゐるのを見付けることがある。章魚は岩や藻と殆んど同じ色をしてゐるので、馴れる迄はなか／＼見付からない。小さい章魚でも生きてゐるうちはとても強いもので、特にあの澤山の足が腕にまつはりついて吸ひ付かれては耐らないので、此處と思ふ所を魚刺で突いて見る。巧く當ると章魚は慌てて足で魚刺の柄にからみついて来る。其處でぐい／＼と魚刺をひねると、章魚は苦しまぎれに全部の足で柄に吸ひつく。さうなればわけなく漁れるのであるが、なか／＼いつもさう巧くはいかない。途中で息が苦しくなつて浮き上つたりしてゐるうちに逃がして了ふことも勿論度々ある。

吾々が狙ふのは章魚とか、かさご類の所謂底魚であるが、黒鯛の子だのべらだののやうに、途中を泳いでゐる連中も上手な人には突けるのださうである。黒鯛の子はいつも澤山で群をなしてゐる。底に潜つてぢつとして居ると、すぐ眼の前を敏捷な姿で後から／＼と續いて通り過ぎて行く。少し丈けの高い海藻のゆれてゐる所が、連中には御氣に入りの場所と見えて、藻の間を縫つて廻り燈籠のやうに、いつ迄もひらく／＼と廻つてゐることが多い。此の邊の土地では、釣りの餌に使ふごかいをとるのは主として此の岩礁地帯である。岸に近い背の立つ程度の浅い所で、よく漁師が鐵の楔を底の岩に打ち込んでは岩をはがしてゐるのを見ることがある。手頃な岩片がはがされて、岩の中に孔をつくつてひそんでゐたごかいが顔を出すのを、漁師は大急ぎで潜つてとるのである。一寸でも愚圖／＼して居たら黒鯛にとられて了ふので、岩を剝がしたら、まだ濁り



の去らぬ水の中へ逆まに潜り込んで行くのである。楔を打ち込む音がすると、黒鯛は澤山集つて来てその周圍に待つてゐる。そして岩が剝がされると、すぐさつと飛び込んで来てご、かい、を持つて逃げて行く。漁師はいまいますがつて追ふのであるが、黒鯛の方は平氣である。かういふところを見ると、魚と漁師とは仲のいいものである。

魚を追つかけてゐるうちに段々沖へ出て、岩礁地帯のはづれ近く迄行くことがある。そのあたりへ行くと、岩礁は脈になつて沖へ延び出てゐるので、脈と脈との間は狭い峡谷になつて深く切れ込んでゐる。谷の底は砂地で、急に十尋位の深さになつてゐる。水にはかに暗緑色になつて、その暗い底の砂地が妙に綺麗になだらかになつてゐるのが却つて氣味が悪い。潜つてゐるうちに、少し深くなつて岩の色が變つて來たと思ふと、その隣りは恐ろしい深い谷になつてゐる。そしてその青く暗い谷底が、綺麗な砂地になつて藻さへ生えてゐないのが、何だか生物の世界でない世界の入口のやうに見える。潜りながら急にこの海の底の谷間を覗き込んだ時の神祕的な恐ろしさは、一寸外では經驗出來ない感じである。そんな時に周圍を見廻して誰も居なかつたりしたら大變である。大急ぎで眞劍になつて泳いで逃げ歸るのであるが、岸へ上つても心臓の鼓動はなか／＼止らない。

日本海の海岸は年々に沈んで行くと言はれてゐる。辨慶で有名な安宅の關といふのは、私たちの毎夏行つた所から數里と距つてゐない所であるが、當時の關趾は今では半里も海の沖になつてゐるといふ傳説がある。晴れた日に海がよく澄んでゐると、水底に鳥居のやうな形のものが見えるといふ話であるが、私は覗いて見たことはない。澄んだ深い海の底を覗くことは非常に恐ろしいものである。あの眞蒼な暗い碧玉色の海の底に、人間の遺跡を示すやうなものが見



えたら、どんなにぎよつとすることかと思ふと、とてもそんな所へ行つて見る勇氣は出ない。

さういふ傳説は日本海の沿岸到る所にあるらしいが、その外にも時々漁師の網に石器時代の住民の使つた土器がかかつて來たといふ話もある。それも一つや二つの例ではないので、日本海の沿岸の大部分の土地が年々沈降して行くといふ話は、大抵の人は信用してゐることである。この問題は地球物理學的に見て、特に日本の島嶼の成因とか、日本の地震の問題とかに關聯して大切な事柄なのであるが、本當の證據になるやうな資料は思ひの外乏しいやうである。例へば或る海岸の地點の五十年前の寫眞と、同じ場所の現在の寫眞といふやうなものと比較することが出來たら、所によつては案外それ位の年月の中でも、はつきりした證據が出て來ないとも限らないと思はれるが、さういふ例も餘り見たことがない。

中學時代の海濱生活の舊い紀念寫眞を眺めながら、色々の思ひ出に耽つて見たが、魚刺を持つて魚を追ひ廻すやうなことはもう二度とは出來さうもない。然し魚刺を小脇に岩頭に立つてゐる勇しい寫眞の方は、或は日本列島の構造の研究に何等かの貢獻をする日が來ないとも限らないだらうと、變つた夢を描いて見るのは一寸楽しみである。何時か暇が出來たら、あの同じ土地へもう一度行つて見たいと思ふこともあるが、漁村の姿には昔の面影も残つてゐないことだらうと思はれる。(昭和十三年五月)



ツ  
ー  
ン  
湖  
の  
ほ  
と  
り



もう十年も前のことであるが、倫敦に留學中私はユニバシティカレッジのポーター老先生の所へ繁げ／＼出入りしてゐるうちに、一緒に瑞西へ行かうとさそはれたことがあつた。そして二週間許り、ポーター先生や引退した英國の老法律家夫妻と、ツーン湖畔のオーベルホッフエンといふ小村で暮したことがあつた。

ツーン湖のほとり、瑞西の夏は美しかつた。ホテルは小高い丘陵の上にあつて、ツーン湖面を真下に見下し、その正面にニーセンの嶺が聳えてゐた。上から見下した瑞西の湖は青碧の水をたたへ、晴れた日には、雲の影が濃紫色に輝いて、湖面にうつるのであつた。湖畔のゆるやかな起伏の原は、鮮かな緑で蔽



はれ、古城シャトの白い塔が一つその中に立つてゐた。すべての色が鮮明で、周囲の風物は盡く私達が昔から持つてゐた「美しき歐羅巴」の姿であつた。

倫敦の生活に疲れてゐた私は、此處へ来て急に元氣になつた。ホテルもよかつた。なだらかな斜面に建つてゐた三層樓といふ感じの此のホテルは、一階のバルコンから爪先下りの庭に續いてゐて、大きい噴水をめぐつて、色とりどりの花が植ゑこんであつた。

天氣は毎日のやうによかつた。朝食を濟ませ、美味い瑞西の牛乳をのんで、蔓薔薇の軒下に出て腰を下してゐると、強い日光が葉越しに射して来て、敷き詰められた細い砂利の上にも、白い夏服の上にも、點々と輝いた光斑を作つてゐた。高い土地に特有な清々しい空氣が始終肌をなでて、強い日光が少しも苦にはならなかつた。さういふ時にはよくポーター先生と、アメリカの何處とかの大學の Professor of Constitution of History といふ私には何のことかも分らない専門の學門をしてゐる先生と、それにリーズベシヨツの僧正とかいふ老人とが集つて、心靈學の話などをしてゐた。ポーター先生はオリバーロッチの心靈學の話をして、年をとるとああいふ風になるものと云つてゐた。さういふポーター先生ももうとつくに六十を越してゐて、眞白な髪と髻との間に赤い童顔を覗かせてゐた。歴史の先生は、心靈學には必ず女が入つて来る、その點が面白いと云つてゐた。さういへば日本でも、千里眼にしても靈媒にしても、必ず女が入つて來てゐるやうだと、この人達の話を傍でおとなしく聞きながら考へて見た。

外國人といへば、何處へ行くにも必ず夫人がついてゐて、所謂社交的な話許りしてゐるものかと思つてゐたが、かういふ先生方は皆一人で來てゐて、社交とか政治とかといふ問題とはひどくかけ離れた話をしてゐるのが珍しかつた。

此處のホテルは御馳走も随分よかつた。食堂では、老法律家モード氏夫妻がホテル第一の賓客で、眞中から少し離れたテーブルに二人でついてゐた。そし



てその横にポーター先生の小さいテーブルがあつた。ポーター先生は倫敦の學界では長老格で、永い間ユニバシティカレッジの教授の地位を占めてゐて、丁度その年は英國學術振興會長をもつとめてゐた人なので、ホテルでも大變待遇が良かった。私は英國人の眼には随分若く見えたらしく、子供が一人で外國へ勉強に來てゐるといふので、ポーター先生が大變親切にしてくれた。それでポーター先生のお客といふ格で、先生のテーブルに座らせられた。アメリカのお金持達を尻目にかけたのは、恐らくこの時が初めてで、そして勿論もう最後のことであらう。

毎晩ちやんとドレスをして食卓につくのも馴れて了ふと、却つてきまりがついて良かった。モード夫人は眞黒な服に飾りの何もついてゐないのを着てゐた。細面の綺麗な老夫人で、御殿の大奥様といふ感じであつた。只一つの装身具として、細い指に大豆位の大きいダイヤが光つてゐた。

長期滞在の客が多い此のホテルでは、客人はそれ／＼自分の好む葡萄酒を注文して、晚餐の時にのみのであるが、その葡萄酒の罫には夫々客の名前を書きつけて納つて置いて、毎晩夕食時には出すのであつた。初めての日の食卓で、葡萄酒の表をもつて來て、どれにしませうと云つて來た時はちよつとどきまぎした。左側に縦に色々な葡萄酒の名を書いて、上に横に年代が書いてあつた。そして各々の葡萄酒について各年代のものに色々なマークがつけてあつた。葡萄酒は舊いもの程良いと思つてゐた位の知識しかなかつた私は、「プロフェッサーと同じもの」と云つて胡魔化すより仕方がなかつた。

晚餐がすむと、よくモード氏夫妻に招待された。此の夫妻は引退後世界中を廻つて歩いたが、結局此處の景色が一番氣に入つたと云つて、四年この方、此のホテルに落付いて居るのだといふ話であつた。それも二階の正面のバルコンに續いた四室を借り切つて、室内の調度品を全部自分で取り換へて住んでゐ



た。居間のドアをあけると、直ぐ眼の前に厚い緑色のカーテンが下りゐて、それを押しあけて部屋へ入るやうになつてゐた。そしてそのカーテンには丁度目の高さの所に、赤い小さい布片がつけてあつた。時々慌て者が部屋を間違へてドアを開けて覗き込むので、此のカーテンをつけたのであるが、それでも中には、此のカーテンを押し開けて中を覗いてから「失禮しました」と云つて出て行く客があつたとモード夫人が説明してゐた。それでも此の赤い目印をつけてからは、誰もカーテン迄押し開ける人は無くなつたといふ話であつた。

居間は案外簡素にしてあつた。そして所々に電氣スタンドが澤山灯つてゐた。大抵はバルコンへ通されて、コーヒーとリキュールが出た。そしてモード夫人は一人々々の客に煙草を喫むかときいて、灰皿のついたスタンドを別々に持つて来てくれた。モード夫人の物腰には日本の茶の作法のやうなものが見られたのも面白かつた。何かを取りに立つやうな時などは、その通路の側にある小さい卓やスタンドのやうなものを、一々一寸わきに動かしては通つた。充分広い隙間のあるやうな時でも、スタンドの脇をすり抜けて行くやうなことは決してなかつた。

ニーセンが眞黒に正面に聳えてゐて、その頂には灯が一つ見えてゐた。此の二階のバルコンからは、遠く左の方にインターラーケンの街の燈も遙か下に見えた。そして月明りに、アイガーとメンシュの山嶺が遠く浮いてゐた。星は毎晩のやうに綺麗に輝いてゐた。モード氏は此のバルコンに小形の天體望遠鏡を設へつけて、時々星を覗くのを楽しみにしてゐると云つてゐた。丁度土星が大きくニーセンの上にかかつてゐたので、その環がよく見えると云つて覗かせてくれた。モード氏は、土星とその環との間が本當の隙間かどうかを見る爲に、外の星が土星の眞後を過ぎるのを見ようと思つてゐるが、なか／＼さういふ機會には出會はないと云つてゐた。もつとも恆星と遊星とが丁度重ることは滅多



にないので、遊星に大氣があるか否かといふやうな問題を解くのに絶好の機會として天文學者も待つてゐるのであるが、あんなに澤山星がある癖に滅多にさういふ場合は起きないのである。モード氏がそんなことを少しも知らずに、時々望遠鏡を覗いて待つてゐるのは一寸滑稽と云へるかも知れないが、その考へ方自身は立派に科學的であるのが面白かつた。

ポーター先生が居た爲か、よく物理の話が出た。丁度、G・P・トムソンが電子の波動性を示す實驗をやつて有名だつた頃なので、モード氏はあれは本當かといふやうな質問をしてゐた。ポーター先生は童顔で笑ひながら、「電子は不思議なものですよ、親爺(J・J・トムソンのこと)が球だといふのに、息子はそれに羽をつけて飛ばせて了つたのです」と答へてゐた。モード氏夫妻は不思議さうな顔をして聞いてゐた。私にも何のことか分らなかつた。そしてポーター先生が一人でこゝくしてゐた。

下の部屋で、蓄音機が何か大物のシンホニーをやり始めた。一寸意外に思つたのは、此の人達はレコードといふと無闇と眉をひそめることであつた。「この次が、タンホイザーで、その次が……で、それからまだ……あるのですよ。毎晩のことですから」とモード夫人迄が珍らしく吐き出すやうに云ふ。まづレコード音楽などをきくのは、田舎の美術青年が文展の繪葉書を蒐集するやうなものとも思つてゐるのかも知れない。これも英國風な貴族趣味の一面なのであらう。此の癖のよく現はれる例は、この人達は所謂英國人の澤山行く場所をひどく輕蔑してゐるのである。そして勿論アメリカ人といへば、最下等の人間といふことにしてゐるのが可笑しかつた。「此の頃は何處へ行つても、ENGLISH SPOKEN せう。あの下に AMERICAN UNDERSTOOD と書き添へて置けば良いのでせう」とモード夫人も案外辛辣なことを云ふ。

四年越しに借り切つてゐる部屋の一つは、すつかり改造して、圖書室になつ



てゐた。そしてアルプスに關した本だけを集めた立派な蒐集<sup>コレクション</sup>が出来てゐた。

モード氏は其の中から、ウィムバーのアルプス登攀記と、著者は忘れたが、

岩<sup>ロッククライミング</sup>攀の研究といふ部厚な本とを採り出して貸してくれた。岩攀の研究の方は案外しつかりした研究なので驚いた。モード氏は若い時でも餘り山登りなどはしなかつただらうと思はれる身體付きの癖に、岩攀の技術にはなかく造詣が深いらしく、色々その方面の話をしてくれた。

四五日は見る間に過ぎて了つた。そしたら牛乳の飲み過ぎで、型の如く腹をこはして了つた。餘り上等でない室を借りてゐたので、眺望のない後の山に面した寢室の中で、朝からベッドに就いてゐる日が二三日も續いた。ポーター先生が心配して時々見舞に来てくれたが、腹はなかく治りさうもない。それに珍らしく雨が降つて鬱陶しい氣持の上に、少し心細くさへなつて來た。ポーター

先生は讀む物があるかと云つて、ヘンリー・ゼームスの『ねぢの廻轉』といふ

本を貸してくれた。何氣なく讀みかけて見ると、妙に頭の冴えるやうな本で、思はず引き入れられて了つた。女主人公が幻想を見る姿が如何にも切實に迫つて來て、それに何となく不安を與へる周圍の雰圍氣の描寫が恐ろしかった。外は眞暗な雨の夜であつた。下の廣間では舞踏會が催されてゐるらしく、賑かな音樂が聞えて來る。時々枕を裏返しにしては、熱した頭を冷い枕の面に埋めながら、女主人公の幻想に引きずられるやうな氣持になつて行つた。そして所々にぶつきら棒に挿入されてゐる The turn of the screw. といふ一句が、妙に夢幻的な不安を與へてゐた。讀んで行くうちに段々恐ろしい切迫した氣持が嵩まつて來た所で、突然この一句に遭ふと、何だか人生とか運命とかいふものが此の句の裏に祕められてゐて、それがちよいと顔を出すやうな氣がした。ねぢは廻つて舊<sup>もじ</sup>の場所に返る、然しそれは最早や舊<sup>もじ</sup>の場所では無いといふやうな聯想がこの説明しがたい不安の基調をしてゐるやうな氣がした。もつともこんな氣



持は、異國のしかも旅の空で一人病床に就いてゐるといふ特殊の環境と、それに英語の力の不足による意味の曖昧さとかから來た所が多いのであらうが、とにかくひどく印象に残る恐ろしい本であつた。

ゼームスでおどしつけられたせゐでもあるまいが、それから二三日して腹も治り、毎日ポーター先生の御伴をして、附近の谷を歩き廻つて、瑞西の山家の生活に親しんで愉快な日を暮した。モード氏の所へも毎晩のやうに招待された。

此の二週間が私の在外中一番の豪奢な日であり、且つ楽しい日でもあつた。

愈々明日倫敦へ歸るといふ日の夕方、ポーター先生は、私を村の小さい喫茶店へ連れて行つてくれた。ポーター先生は毎夏此のホテルの常客で、まだ後一月位は居るといふのであるが、私は實驗を急いでゐたので、到頭残り惜しいながらに、此の生活を切り上げることにしたのである。

倫敦へ歸つて暫くしたら、知らぬ本屋から本が一冊届けられた。ファウラー

の King's English である。同時にモード氏から手紙が來て、「貴君の英語は、英國へ來て半年位とするとながく巧い。然し時々教養のある英國人だと決して使はぬ言葉を使ふやうだ。例へば「*im*」といふやうなことは滅多に云はぬものだ。本屋から良い本を一冊届けさせたから、それで勉強しなさい」と云つて來た。半年英語を勉強した割には巧いと褒められたのは少々恐縮した。

King's English は成る程良い本であつた。外國人が英語を書く時は、とかく、形容詞でも動詞でも皆名詞にして *is* でつないで、堂々たる文章にしたがるなどといふ皮肉も書いてあつた。それから、むつかしい字をちよいと辭書をつけて挿入するのもいけない。「職工が、日曜服を平日に着てゐるやうで慘めだから」とも書いてあつた。

日本へ歸つて寺田先生に此の話をしたら、早速手帳に本の名を書き留めて居られた。そして、それから半年許りして又理研の部屋へ伺つた時には、机の上



にちやんと此の本が置いてあつた。「なか／＼良い本だね、少し耳の痛いことも書いてあるが」と云つて笑つて居られた。先生は晩年に到る迄、始終英語の文法の本を机の上に置いて、時々一寸のひまには覗いて居られた。「どうも河の名は閉口だね、とんでもない奴に『E』がついたり、つかかなかつたりするものだから」といふやうなことを勉強して居られた。

アルプス登攀記も、ねぢの廻轉も今では岩波文庫に出たので、手輕に再讀の機會が得られた。ちやんと分るやうに翻譯されたねぢの廻轉を讀み返して見て、ツーン湖のほとりで熱い頭で霧のこめた斷崖を覗いたやうな不安を感じた時の氣持を思ひ出した。今度はそれ程恐しいとも思はなかつた。多分頭が少し健全になつたのだらうと安心した。(昭和十三年六月)

## 北海道の夏



北海道の夏は短い。

それは來ることが遅いばかりでなく、去り方が如何にもあはただしいのである。

もつとも北海道といつても、私の知つてゐるのは殆んど札幌に限られてゐるのであるが、その札幌では、八月の初めになると、もう霧の降る晩がある。

夕方から、藻岩山の頂きがすつかり雲につつまれて、その底が水平に山の腹に棚曳いてゐるやうな日には、日が落ちると間もなく雲の底面が急激に下つてくる。そしてやがて札幌の街全體が、雲の中に入つてしまふ。

そんな晩には、街では、霧雨が降る。少し住宅地がかつた街はづれ近くのと





ころでは、街燈の數も少く、廣い街路が眞暗である。そして僅かばかりの街燈がぼんやり霧の中にとぼつてゐる。

そんな晩に、椽側などに籐椅子を持ち出してゐると、着物がしつとり濡れて、肌寒い思ひがする。暗い庭の木立を背景に、電燈の光にすかして見ると、霧の粒が靜かに流れてゐて、丁度輕井澤の夜のやうな感じである。

今年の七月は、北海道には珍しく、毎日暑い日がつづいた。しかし冷害に脅かされた寒い夏の思ひ出が、まだ人々の腦裏から消え去らぬ爲か、七月になつて二三日暑い日があつても、まだ本當の夏が來たといふ氣にはなかくなれなかつた。服装も身體もまだ本當の夏になつてゐないうちに來た暑さは、只の暑さであつて、眞夏の暑さにはなり切れないところがある。そしてその暑さが案外續いて、本當の夏が來たといふ氣になつたら、もう霧雨の降る夜が訪れるやうになつた。

もつともそんな夜は一日か二日のことで、八月に入ると、又暑い日もやつて來る。しかしもうその風の中には、秋の氣が見えて、とうもろこしの葉のざわめきにも、秋の音が入つて來る。

黄昏にもこのあはただしく去り行く北海道の夏の姿が見られる。

北海道くらの緯度のところでも、黄昏の美しさは充分に鑑賞することが出来る。陽がずつと西に傾いて、もう沈み切つただらうと思はれる頃、思ひがけずつと北によつたところに、まだ殘照の光りがある。

札幌には、街の西側に、藻岩や手稻の連山がある。それ等の山々が、黄昏の光の中では、如何にも綺麗に見える。近くの山が紫に、その後の嶺が青く、どの色も透んだ水のやうな感じである。有難いことには、札幌の黄昏には風の無いことが多い。それにどの土地も雜草か密林で蔽はれつくしてゐるので、風さへなければ、夏でも空氣はよく澄む。遅く來て長く續く春の間中、高緯度の土



地に特有な西風に惱まされて来た人々には、この短い夏の穏かな黄昏は、随分待ち遠しい。

かういふ黄昏は、大抵は晝中充分な日射があつた日の夕方に訪れる。

山を埋めつくしてゐる木だちは、こんな日には、豊饒な土から充分な水分を吸ひ上げて、晝中水蒸氣を發散することであらう。そして夕暮と共に訪れる冷氣によつて、その水蒸氣は眞白な霧にかはつて行く。

黄昏の大通りの芝生から、藻岩の連山を眺めてゐると、かういふ霧が、紫と青との山谿の間に生れて、それが非常な勢ひで擴がつて行くのがよく見られる。風がないのに、霧が速く動くといふのも、日中に充分に發散された水蒸氣が過冷却の状態になつてゐて、霧の出来る作用だけが傳つて行くのであらう。

かういふ美しい黄昏に、只一つ不思議なことは、大通りのエメラルド色に輝く芝生の上を散歩する人が極めて少いことである。札幌の人たちには、まだそれだけの心の裕りが與へられてゐないのかも知れない。もつともさう思つて見ると、自分などにも餘りさういふ機會は與へられてゐないやうである。

札幌の黄昏を充分に味ははうと思つたら、人々は少し急がなければならぬ。それは暑さと同じやうに、黄昏も亦あわたゞしく去り行くからである。

七月の初めには、八時になつても、まだ空の青味には晝の名残があつて、淺緑の西の空からは、何時迄も光が送られて來てゐるやうな氣がする。そして目に見えずに、何時の間にか夜が來る。ところが八月に入ると、もうこの黄昏はなくなる。そして七時には夜が卒然と來るやうになる。このやうに曆は吾々に、精確に時の趨移を教へてくれるのである。

八月に入つてからの北海道の夏は、昨年のような例外もあるが、大抵の年ならばそれはもはや夏とはいへない。

八月の中頃から、そろ／＼颱風が來始める。内地にゐた頃は、さうはつきり



と颱風が秋をもつて來るといふ氣はしなかつたが、北海道に住んで見ると、一  
颱風毎に大地が冷え、木の葉がざわめいて行くのが感ぜられる。

北海道迄來ると、颱風の進行は概して遅くなるやうである。風の力は弱まつ  
てゐることが多いが、二日も三日も陰惨な風が吹いて、その後が雨になる。そ  
して前後一週間位もかゝつてやつと晴れたかと思ふと、自然はもうすつかり秋  
の粧ひをしてゐるのに驚くことが多い。

かういふ颱風が二三度來ると、その度に、足早やに秋が訪れて來て、短い北  
海道の夏は、淡い哀愁の中に急いで過ぎ去つてしまふのである。(昭和十四年八月)

## 十 勝 の 朝



機會があつたら今一度行つて見たいと思ふものは、十勝岳の眞冬の景色である。もう五年も前の話になるが、雪の研究のためと言つて、二冬續けて、五度許りも十勝岳へ行つたことがある。

十勝岳といつても、落着く先は、いつも中腹千米餘りの高さの所にあるヒユツテであつた。そのヒユツテは、本當は森林管視人の住ひ家であつて、その頃は〇老人夫婦が棲んでゐた。〇老人はその生涯を北海道の雪の山中で過した變り者で、雪の研究などといふと、誰よりも喜んで、いつも親切に世話をしてくれるのであつた。そして、此處でやつた雪の研究も随分面白かつたが、それにも劣らぬ位、このヒユツテの中の生活が、今では楽しい思ひ出となつて残つて



ある。

雪の深山の晴れた朝くらゐ美しいものも少いだらう。このヒュッテは二階建になつてゐて、下には大きいストーブが据ゑつけられ、二階が寢室になつてゐた。そして寢る前に〇老人がストーブに一杯丸太を詰めこんで置いてくれるので、二階の寢室は丁度良い暖かさになつてゐる。それでも曉け方目を覺すと、窓の外の零下二十度に近い寒さが、ひし／＼と肩のあたりにしのび寄つて來るのが感ぜられる。外はまだ眞暗で、何の聲もない。妙に澄み切つた静けさである。暖い毛布の中にもぐり込んで、人界を遠く離れた眞冬の十勝岳を窓の外に感じながら、うつら／＼してゐると、廳て下の部屋で〇老人のガタン／＼と丸太をころがす音が聞えて來る。ストーブに火がはひつたと見えて、下の部屋が何となく賑かになつて來る。煙突へ逃げる焰の音らしい低い連続した響きの中に、パチ／＼と丸太のはねる音が雜つて聞える。そのうちに勝手もとでは〇老人の細君が起き出したらしく、水を流すやうな音がしたり、時々器物のふれ合ふ鋭い小さい音が雜つて來たりする。覺め切らぬ頭の中に、これ等の人間的な雜音の誕生と發展とが、妙な夢を齎して來る。譬へやうもないが、何か海底の噴火で出來た大海の中の孤島に、色々の植物や動物が流れ寄つて、其處で新しい生命の生長が始まつて行くやうなとりとめもない夢である。

少しばかり煙の匂ひのする暖い空氣が、階段をつたつて上つて來て、冷えた二階の空氣の中に細い線條になつて雜り込んで來るのが頬に感ぜられる。廳てその暖い空氣の流れが寢床一杯をつつむやうになると、覺めかけた腦がまたなだめられて、深い眠りに落ちて行くこともある。

非常によく眠つたやうな氣がして目を覺まして見ると、まだ案外早い。明けに遅い北國の冬の朝は、やつと今陽が出ようとするところである。窓のすぐ外は一面の氷柱で、その隙間から空が青みがかつた薄綠色をのぞかしてゐる。



「やおお天気だ。今日は雪の研究は出来さうもないぞ、残念ながら一つスキーと行くかな」といふ元氣な聲が隣の毛布の中から出る。さうすると、どの寢床も皆一勢にもぐぐくと動き始める。手傳ひに來た學生や、オブザーバーとして同行して來たスキー自慢の同僚たちには、誠に芽出度く晴れ渡つた雪の朝である。

椴松の枝には、軟い新雪が五寸許り昨夜のうちにつもつてゐる。そしてその梢の方は朝陽を受けて薄紅色に輝いてゐるが、下枝の雪にはまだ青みがかつた牛乳色の夜が残つてゐる。毛布の中から首を出して、霜の花が一面に咲いた硝子越しにその色を眺めてゐると、段々その薄紅が木をつたつて下の方へ浸み降りて來る。啄木鳥が一羽、小枝を潜つてこちらの木の幹にとまる。靜かに揺れた小枝からは、昨夜のうちに積つた軟い新雪だけがさらりと落ちて、その下に凍りついてゐる舊い雪の大きい結晶がチカチカと光つて見える。

下ではもう朝食の用意が出來たらしく、味噌汁のにはひがして來る。そしてこんな朝は、皆の仕度も驚くべく敏活で、見る／＼うちにスキー服勇しい姿が揃つて朝食の卓に並ぶのである。

思ひ出しながらこんなことを書いてゐると、十勝岳の雪が直ぐ身近に感ぜられて來る。早く元氣になつて、今一度あのヒユツテへ、顯微鏡だの色々の器械だのを持ち込んで見たいものである。(昭和十三年二月)



伊  
東  
雜  
記



## 一 鐵道のおく前

### 貸別荘

早いもので、もう伊東へ来て二年餘りになる。

初めは家族のものの療養と、私自身の静養のために、一冬のもりで來たのであるが、遠い雪國から此の天惠豊かな伊豆の温泉へ移り住んで見ると、すべての事がまるで夢のやうで、この夏までこの秋までといつてゐるうちに、到頭二年になつてしまつた。

私の借りてゐるのは、かういふ温泉に澤山ある貸別荘の一つである。今ゐる



家は八疊と六疊と、四疊半の茶の間と、それに二疊の玄關がついてゐる。臺所には水道も瓦斯も来てゐて、温泉は臺所の横に専用のもがついてゐるといふ贅澤さである。温泉は夜晝なしに流し放しになつてゐるので、いつ見ても浴槽に溢れ流れてゐるために、底の塵まで透いて見えるやうに綺麗である。初めに來た時は、餘り勿體ないやうに思つて、夜ねる時に温泉の口を止めて置いた。ところが二三日して、差配の人がやつて來て「お宅ではもしや夜温泉を止めやしませんか」と言つて來た。聞いて見ると、この温泉はモーターで汲み上げて此の近所へ配給してゐるので、時々止められるとモーターの調子が狂つて困るといふのである。差配さんは「どうぞ御面倒でも温泉は始終流し放しに願ひます」と言つて歸つて行つた。御面倒でもがよかつたと後で皆で大笑ひをした。

伊東の温泉には二つの系統があつて、海に近い方や川端の所では鹽類泉であるが、私たちのゐる山手の方は單純泉である。それで石鹼も効くし、洗濯や食器洗ひにもすぐ間に合ふので、細君は非常に有難がつてゐる。食事がすむと、温泉の口からホースで湯を臺所へ持つて來て、食器洗ひの器の中へ温泉を流しておく、仕事を片付けてゐる間にすつかり綺麗になつてゐるのださうである。

かういふ風に始終流し棄てられてゐる温泉の湯は、小さい溝になつたり、特に作られた排水溝をつたつたりして、街を縦貫してゐる松川といふ川に入り、海にそゞぐのである。

それで松川の水には澤山温泉が雜つてゐることになる。この川では鰻だの鮎だの鮎だのが澤山漁れるが、味は餘りよくないといはれてゐる。土地の人は温泉がはひつてゐるためだと言つてゐるが、或ひはさうかも知れない。

伊東の温泉脈の水頭は、町の真中では地下數尺位のところにあるらしい。それで舊い温泉宿の浴室は大抵地下八九尺ばかり掘下げて作つてある。ところが



此の頃山手の方で盛んに温泉を掘出してからは、この水頭が段々低くなるのださうである。餘り低くなると、今度は温泉の排水を川へ流すことが出来なくなるので、此の頃は浴室を普通の高さにして、モーターで温泉を汲み上げるやうに段々變つて來てゐるらしい。

水道は町の南はづれに迫つてゐる水道山から來てゐる。私はまだ行つて見たことはないが、何でも岩の間から大變豊富な清水が湧いてゐて、それがすぐ水源になるのださうである。それで夏でも此處の水道だけはとても冷い。

少し澤山水を使ふところなどでは、眞夏でも清水のやうな冷い水が呑めるさうである。普通の私たちの家でも井戸くらの冷さはある。水道の水といへば、生温かいものと決めてゐた私たちには、この水道は非常に珍しかった。

温泉も良いし、水も良いし、それに魚や野菜も新しいし、大變恵まれた土地である。それでもかういふ貸別荘の家賃はまだ月三十圓から四十圓迄くらのものである。

## 魚市場

伊東に住んで見て、一番氣に入つたことは、新しい魚が毎日喰へることである。

此の町は漁港をかねてゐるのであつて、小さいながら防波堤もあり、伊豆東岸で漁れた魚ばかりではなく、遠く大島の沖までも出かけて行つた船が、毎日澤山の魚を持ち歸つて來る。魚市場は町の南はづれに近い新井といふ區劃の中にあつて、此處は今でも全くの漁師町である。

最近、妙なことで知り合ひになつた東京のHさんに伊東の魚の話をしたら、早速探險と稱してやつて來た。Hさんは日本料理では東京でも一二を争ふR山莊の主人である。二年も住んでゐた癖に、私は魚市場の朝の光景はまだ見たこ



とがなかつたので、早速二人で出かけて見た。網は朝早くからぼつぼつ揚げられて、魚は午前九時頃迄次ぎ／＼と市場へ運ばれるのださうである。

私たちが行つたのは八時前で、もう少し遅いやうであつた。それでもまだ澤山生きた魚が、市場の石畳みの上に並んでゐた。

時々鰯や鯖などが何萬尾と漁れることがあり、それが漁師たちの主な財源になるらしいのであるが、普通の日には、この漁場では種々雑多な魚が少数宛種類が豊富に漁れる。そしてそれが私たちにとつては有難いのである。

網は大規模なものではないので、一隻の船の一夜の獲物は、石畳みの八疊か六疊くらゐの面積に並べられる程度のものである。鰯が二三匹大きい身體を時々不器用に跳ねて居る隣に、そ、う、だ、鯉が肥つて張り切つた身體を並べて二三十匹ころがつてゐる。や、が、ら、の途方もなく大きい奴が四五匹、これもまだ生きてゐてあの長い身體をびち／＼と動かしてゐる。か、ん、ば、ち、が大小取り混ぜて五六

匹、これも艶々と光つてゐる。死んでゐるのかと思ふと、漁師が手荒に取扱ふ毎に、びく／＼とひれを動かす。その間に魴々が澤山積みあげられてゐる。この魚はなか／＼強いらしく、胸鰭のものについてゐる脚で石畳みの上をはひ廻る奴さへある。か、い、わ、り、と、か、し、ま、鱈とかいふ連中は、此の土地では魚屋の店先で見ても随分綺麗なのであるが、此處で今水から揚がつたばかりの姿を見ると、その五彩陸離と輝いてゐる肌の色には只驚嘆するばかりである。

町の魚屋連中は、誰も彼もゴム長をはいて、これ等の魚の圖の周圍に圓陣を作つて立つてゐる。大體整理がつくと、親方らしい人が真中に立つて、今朝からのせり賣にからした聲をはり上げて、「さあいくら」と怒鳴る。そしてちやんとした名のある魚は、一組づつ賣られて行く。適當な値で打切ると、よく同じ値をつけた魚屋が二三人ゐる。それ等の連中は即座にじやんけんをして、勝つた方がその魚をとつて行くのであつた。



名のある魚が片づく、後は種種雑多な魚が一匹か二匹づつ集まつた山が残る。かういふ雑魚たちは一山いくらで賣られる。そしてよく私の家へもリヤカーの中に魚を入れて賣りに来る爺さんなどのやうに、店を持たない魚屋がかういふ魚を買ふのである。Hさんは、ああいふ魚を東京で立派な料理に使つて見たいものだと言つてゐた。

恰度一網の魚がこのやうにして賣られてしまつた頃には、次の船の魚が市場の向ふの隅に並べられてゐる。魚屋さんたちは又いつの間にかその周圍に圓陣を作つて、親方の来るのを待つてゐる。中には買つた魚を木函に入れて、何段にも積み重ねたものを自轉車の尻につけて歸つて行く魚屋さんもある。

### 野菜 賣り

伊東から川奈ホテルの方へ行くバス道路の兩側には、今盛に開墾されてゐる畑地が澤山ある。川奈の漁村が段々魚がとれなくなつて、村民は半農半漁の生活を立てなくてはならなくなつたので、急いで開墾地を拓いてゐるのだといふ話である。

伊豆の山は、狭い土地にも不釣合に案外重疊してゐて、それが海に迫つてゐるために、伊東のやうな町でも、裏は直ぐ山になつてゐる。さういふ山の斜面は段々に拓いて、蜜柑畑や野菜畑が作つてある。蜜柑畑の方はもう可成り舊くから出来てゐるやうであるが、野菜畑の開墾は此の頃になつて急に盛んになつたやうである。川奈の人たちと限らず、色々の土地から、かういふ開墾の移住民がやつて来て、灌木の藪をどん／＼拓いてゐる。「開墾の者ですが」といふやうな野菜賣りの口上が、馴れない私たちには非常に珍しかった。

開墾などといふ言葉は、もう北海道か樺太のやうな所へ行かねば聞けないと思つてゐたのに、案外の土地で聞いたものといふ感を深くした。



かういふ野菜賣りは、夏などは、朝の三時とか四時とかいふ頃に起きて、畑の野菜を掘り出して、土のついた儘のものをリヤカーに積んだり、背負籠に入れたりして、温泉町の特に別荘などへ賣りに来るのださうである。その野菜は新しく良いといつて、家などでも始終買つてゐるやうである。ほうれん草や赤芽薯のやうなものでも、かういふ新しいものを直ぐうでて見ると、妙に甘味があつて、東京などで喰べるものとはまるでちがつたものゝやうに思はれる。

時々天城山の自然薯といふものを賣りに來ることがある。加賀でよく白山の自然薯といふものを食べたことがあるが、先づそれに次ぐやうな見事なものである。拇指位の太さで、長いのは三尺もあるのだから、折らないやうに掘るのは大變な苦勞だといふことを聞いてゐる。黒い土がついた儘のさういふ自然薯を大切さうに、細い竹などを支柱にして縛りつけて賣りに來る。

山葵も此の土地では大變上等のものが、時々店先などにも轉つてゐることがある。これも天城山系のものらしく、その山葵の色を見ても、まだ見ぬ天城の溪流の水の清さが偲ばれるのである。

伊東の町にも流れて來てゐる冷川ひえといふ小さい川なども、町をはづれて十丁も上つて見ると、もうすつかり深山の溪流の面影があるのであるから、かういふ山葵の生える山奥の溪谷も簡単に想像が出來よう。この山葵をすつて見ると、色はまるで鶯のやうな綠色である。そして生半可な自然薯などよりもつと粘りが強い。まあ伊東の磯の生きた魚の指味に添へるために、自然がわざわざ贈り物をしたやうに思はれるものである。

温泉にはひつて、かういふ野菜や魚を喰べてをれば、誠に天恵の土地といふ感が深い。しかし開墾の人たちの住居などは随分ひどいものである。いつか家にさういふおかみさんが手傳ひに來てゐたことがあつたので、その家を見に行つたことがある。谷間の日當りの悪いところに小屋があつて、開墾畑はずつと



高い山の上にあるので、肥料を運ぶだけでも並大抵の苦勞ではないといふ話であつた。(昭和十三年十二月)

## 二 鐵道のつく頃

伊東の温泉に移り住んでから、もう二年餘りになる。冬のない伊豆の國の空氣と、夜晝なく流れ出てゐる温泉との御蔭で、私自身の健康も立派にとり戻し、家族のものの體質もすっかり改造されて、愈々近くこの土地を離れようとする、俄かに周圍の風物に心を惹かれる。

この温泉には、今年の暮鐵道が通じた。それからまだ數ヶ月にしかならないのに、町の姿が急激に變つてきたのが目に付く。はからずも、鐵道といふものの便利さと恐ろしさを眼のあたり見ることの出來たのも、後の思ひ出になることであらう。

この土地に生れた木下奎太郎氏に去る日會つた時に「伊東もすっかり變つたでせう。折角の良い思ひ出をこわすやうなものだから、僕は伊東へは行かないよ」と言つてをられた。僅か一二年の間にこのやうに變つて行く町の姿を見ると、如何にももつともだといふ氣がした。そして今かういふ文字を止めておくことも、十年後には或はささやかな一つの記録になるかも知れないと思はれる。

## あ き 地

伊東の町にはあき地が多い。勿論町の中心地は、旅館と店屋みせやとが一杯建てこんでゐるが、少し山手の方へかかつた所には澤山のあき地がある。そしてさういふところは大抵畑になつてゐる。私がある貸別荘の前にも、廣い畑がある。ちやんとした區劃整理が出來て、別荘風の家と店屋と土地の人の住居とが建ち



並んだ真中に、途方もない廣い畑のある姿は一寸珍しい。

あき地が多いせいで、それに家が大抵は丈が低いので、町の三方をかこんでゐる山が近々と見える。山が一番美しいのは冬である。雑木林と松林とが入り雑つて、白茶けた紫と暗緑との斑布が、高いけれどもなだらかな山々を一面に染め分けてゐる。そして平坦な頂上だけが黄褐色に残つてゐる山が一際高く見える。そこは馬場平といふところで、一面の薄の原になつてゐるのださうである。さういへば、秋の晴れた空に、その山際が白銀色に光つて見えるのは、薄の穂なのであらう。

冬は大抵よく晴れ渡つた空のことが多い。空気はよく乾いてゐるが、日射しはそれ程強くないせいか、空の色は秋から見るとずつと薄くなつて、純粹なセルリアン青ブリッヂになる。その空の色と、紫色に輝いてゐる雑木林との對比が眼の覺める程美しい。

山の麓の小高いたかみにはよく竹林がある。竹の秋のそれ等の黄色い葉は橙色を帯びて、冬の日に映えた色は非常に暖い感じである。竹林と常緑樹との入り雑つた中に點々と家があつて、その中をずつと山につづいてゐる道が白く乾いて見える。家の前の畑の中に立つと、さういふ景色が近々と身に迫るやうに展開されてゐる。よく山の中腹で枯草を焼いてゐることがあつて、白い煙が少し青みを帯びて真直に立ち昇つてゐる。草が餘程乾いてゐるらしく、煙の色からも盛に燃えてゐる火勢が思はれる。

畑には色々のものがうゑられてゐる。夏の間は玉蜀黍が少し視界をはばんでゐるが、冬になると、一面に白菜風な蔬菜類になつて、その浅い緑があざやかである。來た年には、このあき地の一部が廣場になつてゐて子供たちの恰好の遊び場であつたのが、昨年からはすつかり畑に耕されてしまつた。見てゐると、近所の人々が勝手に色々なものを作つてゐるやうであつた。昨年の春、妻がきい



て見たら、この土地は先頃賣れたのであるが、買手が金を拂はないので宙ぶらりんになつてゐるのださうである。それで地主が少し油断をしてゐるうちに、近所の連中が皆で勝手に區切つて耕してしまつた。地主が來て見て驚いたのであるが、何分餘り大勢なので、誰を叱つて良いか分らなくて、その儘大目に見ておいてくれるのださうである。

近所のお神さんに、妻が「私も少し作つてもいいでせうか」ときいたら、「さあ、御自由に」といふ返事だつたといふ話である。こんな工合で、二坪位の小さい畑が出来たので、赤芽薯だの、菠薐草だの、大根だのを作つて、妻は大得意であつた。事實、畑から採り立てのそれ等の野菜には、特別の甘みがあつて美味かつた。

それにしても餘り暢氣な話で少し可笑しいので、土地の人にきいて見たら、矢張りその通りなのである。此處の土地の所有者たちは、大抵は鐵道の開通を目宛に土地の値上りを待つてゐるので、いつ迄も家が建たなくて困るのださうである。「四五年前迄は二三十圓だつた土地を此の頃は百圓と言つてゐるんですから、これぢやとてもこの町も發展しませんよ」といふ話であつた。それでは、畑でも作つてた方が、時節柄良いのかもしれない。

### 貸別荘後記

伊東の貸別荘は大抵五六軒が一かたまりになつてゐて、その所有者の名によつて、何々別荘と呼ばれてゐる。それ等の貸別荘は、一年を通じて借りてゐる人もこの頃は非常に増えたさうであるが、それでも大抵は夏だけとか、正月だけとかいふ風にして借りる人が多い。それで家の名が始終變るので、何々別荘といふ名前がアドレスとして用ひられてゐる。

これ等の貸別荘は、少し廣い敷地の真中に温泉があつて、その周圍に同じや



うな型の別荘が五六軒並んでゐる流儀のものが多し。然しこの頃は借りる方が段々贅澤を言ふやうになつたせいも、一軒／＼別に専用の温泉をつけたのが歓迎されるやうになつて、さういふ風に温泉を改造することが流行つてゐるやうである。これ等の温泉付貸別荘は、難有いことにはまだ家賃が案外安く、この土地の小さい銀行の支店長などでも、普通の借家の代りにこれを借りてゐて丁度良いくらゐだといふ話である。

此處の貸別荘が氣に入つたので、前に一寸その模様を或る新聞に書いたことがある。そしたら早速反應があつて面白かつた。丁度鐵道が開通した矢先だつたもので、それを讀んで早速やつて來た人があつた。私は一寸留守をしてゐたが、丁度年末のことで、この正月を伊東で送るために安倍能成さん夫妻が見えて、家へ訪ねて來てをられた時のことであつた。玄關ががらつとあいて、御免下さいといふ聲がするので、妻が行つて見ると、見知らぬ老人が宿屋のどてらを着て立つてゐる。

「誠に妙なことを伺ひますが、お宅は何か○新聞に御關係のある方ですか」といふので、妻が驚いていいえといふと、

「實はあの廣告を拜見して伺つたのですが、私もこの冬は孫をつれて、こつちへ參りたいと思つてゐるんですが。どうも工合のいい貸別荘がなくて困りましたね」

「一體お宅ぢや温泉がいつでも流し放しなんですか。それにお臺所へホースで温泉をひいてゐらつしやるんですか」

「はい、さうです」

「いいですな。此處は貸家なんですか、貸別荘なんですか。どうもさういふ風になつてるところはいくら探してもありませんな」と御老人は臺所の方を覗きたさうにする。



妻は安部さんには初めて御目にかかったので、大いに氣がねをしてゐるが、老人は平氣である。

「誠に失禮ですが、あれにはお家賃が大變廉いやうに書いてありましたが、本當はおいくらなんですか」と大きい聲でさう。

「ああ矢張りさうですか。廉いですねえ、前から見たところも立派ですし、本當にいいですね。何處かかういふ風な貸別荘がこの邊にありませんかね」

「さあ、なか／＼どうも」と妻は大いに僻易したさうである。

「どうも難有う御座いました。又何卒よろしく」と御老人は慇懃に御辭儀をして歸つて行つたので、やれ／＼としたといふことである。

「どうも妙なお客さんがありますねと安倍先生が笑つてゐらつしやるので、わたしは恥しくて困りました」と妻が本當に困つたらしいので大笑ひをした。

かういふ貸別荘も勿論この頃はすつかり満員つゞきで、今少ししたら、とて  
も一般の人には手が出せぬやうになることであらう。

### 良い綿の夜具を出す宿屋

××園といふのは伊東では舊い宿屋で、庭が良いといふので昔から有名である。

其處へ同窓の友人で、今は氣象學者になつてゐるK君が御夫婦でやつて來たことがある。そして廣い庭の片隅にある離れに納つてゐるといふ通知が來た。それで早速Y君と二人で遊びに出かけた。Y君も丁度その頃、私と同じやうに靜養のために伊東へやつて來てゐたのである。

その離れは三間位の簡素な一戸建で、もうすつかり舊くはなつてゐるが、もとは可成り良い建物だつたと見えて、木口などはまだしつかりしてゐた。特に障子が上等で、黒くさびた棧が思ひ切つて細く、それに眞白な紙をぴんと張つ



た姿が非常に良かった。その障子をあけて見ると、前はすぐ緑の竹藪になつてゐた。

冬のことだつたので、火鉢をかん／＼起して、三人で話をした。K君の奥さんは傍に居て、時々お茶をいれてくれた。障子には伊豆に特有な強い冬の陽が一杯に照つて、細く交錯した枝の影がはつきりうつつてゐた。妙にあたりが静かなので、一つ三つ物でも作つて見ようぢやないかと、大膽な話が持ち上つた。出来上つたのは一體三つ物になつてゐるのかどうかも知れないものであるが、三人共それで満足であつた。

埋 火 や 障 子 に う つ る 鳥 の 影 虚 雷  
目 に さ む び ん と 淺 漬 の 色 魚 太  
今日もまたいで湯の男薪わりて 三 氣

この××園にも近年新築が出来て、上等のお客は皆その新築の方へ通されることになつてゐる。いつか他の友人がその新築へ入れられてゐたのを訪ねて行つたことがある。その新築の方は、私の嫌ひな風の建物であつた。大きい四角の建物の片側に廊下があつて、庭に面した方をいくつにも仕切つて、全く同じ形の部屋を澤山作つた所謂新しい宿屋の型であつた。廊下からはひつた所が次の間で、そこから座敷につづき、その外側にヴェランダ風な廊下があるといふ風になつてゐて、さういふ同じ形の部屋が澤山並んだ姿は、アパートか極上等な女工寄宿舎といふ感じであつた。ヴェランダも勿論仕切られてあるし、兩隣の部屋との間は壁になつてゐるので、隣部屋との絶縁はよく出来てゐる。この家の新築の方は、その點が少し極端に出来てゐて、二階も全く同じ形の部屋に仕切られ、各部屋毎に梯子段がついてゐるといふ念の入つたものである。どこの宿屋でも互に出来るだけ獨立した部屋が歓迎されることは勿論である。



から、比較的狭い所で澤山の部屋を作るとしたら、この建物のやうになるのは止むを得ないことだらう。それに澤山のお客に互に優越感を持たすためにも、全く優劣のない同じ形の部屋を澤山作る方が有利だと思はれてゐるのかも知れない。しかしはひつて見た感じはどうも面白くないやうであつた。何だか窮屈で、それに日本建築の一番の優れた點であるところの開放された感じが少しもなかつた。毎日コンクリートの部屋の中で、イオンの無い空気を淺く呼吸してゐて、たまさか温泉などへ來てまで、かういふ取りしきつた座敷に押し込められるのは眞平だといふ氣がした。

ところが此の宿屋にはまだ昔の建物が残つてゐて、其處は舊館と呼ばれ、少し安いお客がはひることになつてゐることが分つた。その舊館の方は、ちゃんとした日本風な建物で、廻り椽のついた落付いた座敷になつてゐた。そして庭の眺めも良く、大きい赤松が椽の欄干に近く生ひ立つてゐるといふ案配であつた。Y君はその座敷がすつかり氣に入つてしまつて、早速宿を變へて、その部屋へ移つて來た。

K君夫妻は一泊で歸つて行つたが、Y君の方は其の後一月許りもこの××園の舊館に腰を落付けることになつた。浴室も舊館の方が良いので、黒くさびてはゐるものの立派な檜の浴槽があつた。Y君はよく一人でその浴室を占領して良い氣持になつてゐた。

一月もゐるうちに、Y君はすつかり宿の人たちとも懇意になつて、特に風呂番の男からは色々面白い話をきいたさうである。「昨年主人から出張させられましたね、關西から北陸の温泉を廻つて來ましたが」といふ話はなか／＼面白かつた。その風呂番の話によると、どうも關西の温泉は「サービスが悪い」といふことであつた。Y君がそんな筈はないがと言ふと、その風呂番は「それでも向ふは蒲團の綿が悪いですな」と濟ましてゐたさうである。





その話によると、行く先々で一流の宿屋に泊つて、室内の設備とか食事とかによく注意することは勿論であるが、夜ねてから蒲團の縫目をほどいて、綿の中味を調べて見るのださうである。そしたら殆んど例外なく、立派な裂地の癖に、中の綿は悪かつたといふのである。ひどいことをするぢやないかと言つたら、「なに、又ちやんと縫つておくのですから、ちつともかまひませんよ」といふ話であつた。

さう聞いて見ると、この宿屋の蒲團はしつとりとしてゐてなかなか上等であつた。Y君は置火燵を作らせて、その中でフランスの小説を讀んだり、妙な趣味だが、速記の勉強をしたりしてゐた。そして「この蒲團は中味の綿が上等なんだよ」と笑つてゐた。

良い綿の夜具を出すこの宿屋も、あゝいふ新築を作るやうでは、間もなく普通の温泉旅館になつてしまふことだらう。そして汽車の開通によつて、その變化も亦非常に加速されることであらう。

### 正月の混雑

暮おしつまつて鐵道が開通したので、この正月の伊東の混雑は、前から思ひやられてゐた。果して大變なお客が押し寄せて來たので、どの温泉宿もまるでお客でぎう／＼詰めになつてしまつた。

先日お醫者さんのSさんのところでその話を聞いたが、まるで嘘のやうな話である。××館といふ宿屋は前から土地では色々評判があつたのであるが、果してこの正月には一度に五六人も病人を出してしまつた。伊東の漁師たちは正月の三日間は休むので、鮮しい魚がとれない。それで宿屋では東京などから魚を澤山取り寄せて、貯へておいたのを出すので、とかくさういふ騒ぎを起し易いのださうである。



Sさんが診察をたのまれて行つて見ると、三十疊敷の部屋にお客が三十人はひつてゐた。そして衝立をたてて、疊一疊に一人宛枕を並べてねてゐたさうである。みんな風邪をひいて腹をこわした人たちであつた。さういふ目に遭つて迄温泉へ来る人の氣が知れないと言へばそれまでであるが、年に一度の楽しみを求めて、温泉といふ名の中に幾分の夢想境めいたあこがれをもつてやつて来る人々の普段の押しつめられた生活を思ふと、誠に氣の毒な感じがする。一人の人はとてもたまらないと言つてSさんのところへ入院したが、他の病人たちはそんなところで我慢してゐたさうである。

もつともその宿屋は特別にひどい家なので、どの宿屋も皆がさういふ風ではない。〇〇さんの家で鶏を飼つてゐたが、それが何かの病氣で死んだので、鶏屋の主人に棄ててくれと言つたことがあつた。そしたら、その主人が「勿體ない、買ひませう」と言つたので、驚いてどうするつもりかと聞いたたら、「××館

へ持つて行けば、これだつて立派なものでさあ」と濟してゐたさうである。

「八百屋だつて、賣れ残りの枯れつ葉は××館行きといふことにしてるんですつて」と妻が又妙なことを聞いて来る。ところで三十疊敷の部屋に三十人追ひ込みで入れられて、宿賃はお正月は一泊最低五圓だつたといふのであるが、普段だと二圓五十錢の家なのである。

ところがもつとびつくりする話がある。F旅館の老人の話であるが、元旦の夕方晩くなつて、澤山お客がやつて来て、女の人などは、どんな女中部屋でも、料理場の隅にでもねかせてくれと哀願するので困つたさうである。勿論さういふ所もすつかり満員なのであつた。停車場にはまだまだ澤山ゐますよといふお客の話に、F老人は寒いのを我慢して、吹きさらしの停車場へ行つて見たさうである。そしたら待合室に七八十人のお客さんたちがベンチの上に丸くなつてねてゐた。この正月は特に寒くて、それに名物の西風がびゅう／＼吹きつけて



ゐたので、F老人は一體あの人たちは生きて歸れたかしらと思つたさうである。だから××館へでも泊れた人はまだ／＼良い方なのである。

もつとも後になつて分つたことであるが、「警察力を發動して、民家に分宿させたので」停車場の避難民たちもやつと助つたといふ話であつた。眞偽の程は保證の限りではないが、驚いた話である。(昭和十四年二月)

珍らしい偶然の話



世の中には随分珍らしい偶然の邂逅といふことがある。

昨年の大晦日の日のことである。小宮さんが、伊東の私の家で年越しをするといつて、やつて來られた。午後のことで、私は子供たちを連れて、バスの終點で待つてゐた。

前に小宮さんは、津田青楓さんと安井曾太郎さんと三人で一度伊東へ來られたことがあるといふ話を聞いてゐた。何でも二十何年位前のことで、その頃は未だ今のやうにバス道路が出來てゐなかつたので、小田原からか船で來られたのださうである。その日は運悪く海が大分荒れて、三人共ひどく酔つてしまつて、特に津田さんは、しまひには「血を吐いてしまつた」といふ話であつた。し



かしその時泊られた暖香園が大變お氣に入つて、その上伊東の海の磯魚が可成りの誘惑になつて、もう一度行つて見ようといふ話になつたのである。

バスの停留場からまた自動車に乗り換へて、町はづれの私の寓居の前へやつて來た時のことである。車の中でまたその時の話が出て、小宮さんは、暖香園はまだ昔のやうな姿であるかどうかとたづねて居られた。そして丁度家の前で車が止らうとした時、向ふから中老の紳士がハイカラな洋服を着たお嬢さんと二人連れて散歩して來られた。「あれ、津田見たいな恰好の男がやつて來るぞ」と小宮さんが注意された次の瞬間、車は家の前で止り、その紳士も丁度、車とすれちがはうとした。ところが、それが何と津田さんなのであつた。

「おやおや、津田みたいな男の筈だ。津田だよ」と小宮さんは、車から顔を出して手招きをされた。津田さんの方も勿論これは、小宮さん以上に驚かれた。へんなところで向ふからやつて來る車が止り、その中から小宮さんがぬつと顔

を出されたのだから、それは驚かれる方が本當である。

まあとにかくといふことになつて、皆で家へはひつて話をきいて見ると、益益不思議である。

「一體君は何處に居るんだい」

「實は昨日から暖香園に來てゐるんでね、いつかひどい目に遭つただらう。あれを思ひ出して暖香園に泊つて見たが、もうすつかり變つてゐるね。それより君は一體どうしたんだ」

「いや僕もね、あの時のことを思ひ出して、一度伊東へ行つて見たいと思つてゐたところ、丁度中谷君にすゝめられたので、年越しをしに來たところなんだよ。君は一體時々伊東へ來るのかい」

「ううん、あれから初めてなんだ」

「さうか、僕も初めてなんだ」



これはどうも珍らしい話だと、傍できいてゐた私も全く驚いてしまつた。二十何年ぶりに、偶然に伊東へ來合はせ、そして丁度自動車の止つたところで落合ふといふやうな話を、單なる偶然の暗合としたら、これは正に何億兆對一、或はそれ以下の珍らしい例である。かういふ話になると、これはどうも確率論などで取扱つたら、とても人間一生に一度なんていふ數は出て來ないだらうが、そんなことが實際にあるのだから、世の中は面白いのである。

次の日は、元日である。朝眼を覺ますと、珍らしく雨になつてゐて、雨だれの音がぼとぼととしてゐた。それでもゆつくりねて、温泉を浴びて、雨戸をすつかり明けはなつと、もう雨は止んで、少し青空がのぞいてゐた。

朝のうちに打合せをしておいて、午後皆で川奈ホテルへ遊びに行くことにした。小宮さんも津田さんも、伊東へ來てゐることはお互に夢にも知られなかつたのだから、昨日どつちかが二三秒おくれたら、知らずじまひになつたのだが、なあなどと話しながら、賑かに自動車に乗り込んで出掛けた。ゴルフ場の芝はすつかり枯れて一面に黄色くなつてゐる。それでも流石に伊豆の暖い海に面した土地のこととて、枯芝の庭には、もう新しい緑が萌え出る準備がされてゐるのが感ぜられた。

パーラーに落付いて、皆で珈琲をのみながら、海を眺めた。海はひどく白みがかつた色をして、曇つた空との境がぼんやりしてゐた。冬の海のおだやかな景色といふのは、伊豆へ來るまで滅多に見なかつたのであるが、あの薄白く曇つた海に向ふには、もう春が近々と迫つて來てゐるのが感ぜられた。かういふ南の方の國に棲む人は仕合せだといふ單純な考へがまたふと思ひ浮んで來た。

お正月のこととて、廣間では活動寫眞があつた。この廣間には兒玉希望氏の十和田湖らしい極彩色の大きい繪が懸つてゐる。今日はすつかり暗幕を引きまはして、何かアメリカ物の映畫をやつてゐた。われわれの生活からひどくかけ



離れた或る種のアメリカ映畫には、まるでちがつた意味での一種の俳味があつた。見終つた頃は、もうすつかり忘れてしまふやうな映畫も、今日のやうな日に見るには却つてふさはしかつた。

次の日の午前、小宮さんは

あまだれや伊豆の伊東の寢正月  
蓬里雨  
といふ句を残して、御機嫌で歸つて行かれた。

かういふ話は、外の人には別に面白くも何ともない話かも知れないが、私には大變珍らしい偶然の話の良い例と思はれるので書き留めておくことにした。

(昭和十三年)

## 大 謀 網



伊豆の伊東の温泉の沖合に、大謀網が設置されてゐたころの話である。

高等水産學校につとめてゐるI君が漁撈の視察にやつて来て、大謀網を見に行きませんかといふので、一緒に出掛けることにした。

I君は心得たもので、土地の水産組合へ行つて名刺を出して、大謀網の魚を運ぶ船に乗せてもらふやうにすつかり手配してくれた。

四月のことで、海の風はまだなか／＼寒い。小さい發動機船の中には、部屋らしいものもないので、機關のそなへつけられてゐる穴のやうな所へもぐり込んで、首だけ出して親方らしい人に色々説明をききながら行つた。

半里ばかりの沖合に、旗が二本ひらめいてゐる。太い孟宗竹を何十本と束ね



て縛つたものを浮標にして、重い錘をつけておくと、それが海の中で所謂定置網の據點になるのである。さういふ據點になる大きい浮標が二つあつて、その各々には旗を立てて目印にしてある。二つの浮標の距離は四町もあるといふ話であるが、海の中では、それがまるで二本並んでゐるやうに見える。

船が近くへ行くと、この二つの據點の浮標をつらねて、同じやうな孟宗竹の浮標が澤山海上に浮んでゐるのが見えて来る。それ等の浮標は、旗印を兩頂點に持つた紡錘形をなして水上に配置されてゐる。この紡錘形はそれで長さが四町になるわけで、幅も七十間といふ龐大なものである。

網はこの紡錘狀に配置された浮標から水中に垂れ下つてゐるのであつて、たつぷり海底まで届いてゐる。そして網の底は一枚に續いて海底を蔽つてゐるのであつて、いはば途方もなく大きい紡錘形の口を持つた攔網たもを海上に浮かべたやうなものである。もつともそれでは魚のはいる口が無いので、紡錘形の腹の一部が切れて入口になつてゐる。

その入口の一方の浮標からはまた他の澤山の浮標が長く續いて眞直ぐに伸び出てゐる。そしてそれ等の浮標からは、一枚の網が水中に垂れ下つて底まで達してゐるのださうである。それは垣網といふのであつて、大抵はこの垣網はその地點の潮流の方向と大體垂直になるやうに配置されてゐる。

魚たちは、潮流に沿つてやつて来て、この垣網につきあたる。さうすると、魚は本能的に廻游の方向をかへて、網に沿つて沖の方へ行くのださうである。垣網はいつも大謀網の入口から、海岸の方へ延び出るやうに作つてある。それで、垣に沿つて沖の方へそれた魚たちは、いつの間にか、大きい攔網の入口に誘ひ込まれてしまふ。入口の兩側からは、この攔網の内方に向つて短い垣網が二つ建つてゐる。それが丁度瓣のやうな作用をして、一度大謀網の中へ誘ひ込まれた魚たちは、いつまでも周圍の網の面に沿つて、ぐるぐる泳ぎ廻つてゐる



のだといふことである。原理からいへば、かういふ大規模な大謀網でも、琵琶湖の葦簀でも、子供たちの使ふ魚とりの竹籠でも全く同じものらしい。

垣網は藁で作つてある。青暗く透きとほつた海の底まで、その藁の網が黄色く見える。これは単に魚をおどして、廻游の方向をかへさせればよいのだから、目の極めて粗い亂暴な網である。「藁は海の中では光つて見えると漁師たちはいふのですが、それで魚が驚いて逃げるので、垣網には何處でも藁を使ふやうです」とI君が説明してくれる。「本當でせうかね」とI君は今度は親方にきく。「まあ、さういふ理窟になるんでせうな、魚の方からいへばせれば」と親方の返事は極めて悠暢である。

大謀網の方は麻の立派な網であるが、最後に魚を集めてとる部分以外は、これも可成り目の粗いものである。それでも大抵の魚は、充分自分の身體の通るくらゐの目でも、それをくゞり抜けて逃げて行かないものだといふことである。もつとも三浦さんが潜水服を着て、潜つて見た話を讀んでみると、逃げる魚も可なりあるらしいが、そんな利口な連中は、勝手に逃がしておくのであらう。

ところが、何分縦が四町、幅が七十間、それに深さも五十尋位はあらうといふ尨大な網だけに、その中へはひつた魚をとるのが大變である。五艘位の舟に澤山の屈竟な若者が乗り込んで、一列に舟を並べて網の一方にとりつく。そして皆が船縁に並んで、胸をびつたりと船縁につけて深く身をかがめながら、手が海面につくまでずつと腕をのばして網をつかまへるのである。

伊東のこの大謀網では、その時は百三十人くらゐの人が働いてゐるといふ話だつた。一せいにかけて聲をかけながら、一方の手で網の目をたぐりあげて、他の手で次の網の目をつかむ。そしてうんと力を入れてそれを引き上げながらまた次の目をたぐるといふ風に、順々に網の底を五十尋の海の底から引き上げて



は放すのである。そして網の一方から順々にたぐつて行くと、魚はだん／＼一方の隅に押しつめられる。船は自然に引きよせられて、極めて徐々に動いて来る。かういふ風にして、毎秒一回位の割合で、左右の手で交互に網をたぐり上げて行つて、三時間位かかつてやつと一方の隅まで魚を押しつめるのであるから、その労力は大變なものである。

その間一寸も力をゆるめることは出来ないし、全身の力を船板にくつつけた胸の骨に持たしてゐるのだから、身體のためにも悪いことだらうと思はれる。かういふ風にして網をたぐるのを、漁師たちは「胸しめ」といつてゐるさうであるが、この胸しめを生業としてゐる漁師の胸は鐵板のやうに固くなつてゐるといふ話である。

何か少しばかり改良をして、簡単な器械でも使つて、もつと樂にこの大謀網をしめることは出来ないかといふことをI君は考へてゐるらしい。もつとも浪の荒い日などに、少し無理をすると網はすぐ破れてしまふので、さう簡単に器械化をすることは出来ないといふことになつてゐるらしい。それにしても、人間の腕を齒車の齒の代りにしたり、胸の筋肉をクツシヨンの代りに使つたりするのはどうも勿體ないやうな氣がした。

それからもつと困ることは、かういふ風にして毎日二回、午前と午後とに網をしめ、百三十人の人が三時間かゝつて、さて網をあげて見ると、小ものが數十尾ぐらゐはいつてゐることが、まあ普通といつてよいらしい。主な収入は鰯であつて、冬の二月ごろ、一網に一萬尾も二萬尾もはいることがあり、それで殆ど一年間の収益があげられるといふ話であつた。

それで網をしめて見なくて、大體どれぐらゐ魚が中にはいつてゐるかを知る方法があれば大變都合がよいのであるが、それもまだ方法がないらしい。超音波を海の底へ送つてやつて、その反射を見る場合、魚群があるとその群からも



反射されるので、魚群の探知が出来るとか、又魚が澤山ゐると渦が出来るのでそれを探知すればよいとか、色々の方法があるといふことは、前にもきいたことがある。今この廣い海の上で荒浪がしぶきをあげてゐる姿を見ると、水産物理學も愈々實際に役立つまでには、本當に荒海の上で生活するだけの覺悟をもつた物理學者が二三人出て來なくてはならないのだらうといふ氣がした。

網をしめるかけ聲が段々近づいて來て、もう船縁に眼白押しに並んだ漁師たちの顔がはつきり見えるころになると、網の目が急にこまくなる。もう網の底がすつかり地を離れて浮き上がつて來てゐるので、急にしめる速度が増す。「鰯の三千もはいつてゐる時なら、もうそろ／＼大變な沫があがるのですが」と親方が説明してくれる。

網しめの船がぐるりと圓陣を作ると、その中の水面が急に油を流したやうに平らになる。すると黒い鱗が二つ三つにゆつと海面にとび出て、それが水面上に條痕を作つて走り廻る。まんぼうがはいつたのだといふことである。私たちの船は網の最後の口のところに待つてゐる。もう網は十坪位迄しめられて、底が水面から四五尺の所迄もちあげられたのである。眞黒なまんぼうは餘り猛烈に走り廻るので、漁師が手かぎを眼の所へ打ち込んでやつとのことで船の上へひきずり上げる。何分三尺四方以上もある巨大な身體がまる／＼と肥つてゐるので、引き上げるのは大變な騒ぎであつた。これは漁師が食べるので、外へは賣り出さないのださうである。

最後に網を船の底へうちまける。めじが十尾ばかりと、あとは鯛やひらめなどが二三尾宛ゐて、外に雑魚が一籠ばかり雑つてゐた。これでは何程のことにもなるまいとちよつと氣の毒な氣もしたが、親方は「これでもまあいゝ方でせう」と、まるで初めから期待してゐないやうな口吻だつた。

面白いことには、船艙の底へ一杯に、長さ二寸位の桃色の小さい魚が澤山は



ひつて来た。今迄に見たこともない妙な形の魚で、口蓋が長く針状に突き出し、尾は上下不同で鮫の模型のやうな形のものである。それをはき集めて魚籠に押し込んだら、大きい籠が一杯になつた。漁師はそれを上から足でぎゆうぎゆう踏みつけて、海へ流してしまつた。

「身體は小さいが矢張り鮫の一種でせうな」と漁師は言つてゐた。餘程不漁で困つた時には漁師たちが喰べることもあるが、普段はとても不味くて、どうにも喰べられないものだといふ話であつた。

この頃、この大謀網はなくなつたらしい。暫く休んでゐるのかも知れないが、或は魚がだん／＼とれなくなつて餘り引き合はないといふ話だつたから、もう止めてしまつたのかも知れない。網代からのバスの中で、小さい大謀網の浮標が紡錘状に並んで、碧い海の上に浮んでゐるのが見える。これも何時まで續くものか少し氣になる。汽車が通ずるやうになれば、魚が段々逃げてゆくのは致し方ないことであらう。

日本各地の大謀網は段々なくなるのださうで、伊東のものなどは比較的珍しかつたといふ話である。そのうちにかういふ漁獲の方法が絶滅する日も案外早く來るかも知れないと思つて書き止めておくことにする。(昭和十四年一月)



溫

泉



私は温泉が非常に好きである。少年時代を北陸の温泉地に送つたせゐかも知れないが、今でも少し身體の調子が悪い時などは、いつも温泉に行つたら直ぐに元氣になるのだらうといふ氣がする。元氣な時は又それなりに、夏休みなどには氣の向いた本でも持つて、山の温泉へ行つて見たいと考へることが屢々ある。

温泉が本當に身體の爲に良いかどうかは、現今の醫學では決定的な論斷は下せないといふ話である。まあ效くだらうといふことくらゐは云へるさうであるが、何故温泉が普通の湯、特に湯の花でも入れた湯よりも餘計に效くかといふやうな點になると、まるで分らないといふ話である。まあラヂウムがあるから



だらうとか、氣分の轉換が出来るからとか、都會生活を離れて清淨な空氣が吸へるからとかいふ程度の話はあるが、別に大した根據のある話ではなささうである。

それでも私には温泉が非常に身體に效くやうな氣がして仕方がない。この信仰は、現今の科學が温泉は效かないといふ「證明」をして見せてくれるやうなことがたとへあつたとしても、なか／＼に搖がない位根強いものではあるまいかと思はれる程である。もつともその心配はないのであつて、一時温泉の效用などを顧る暇のなかつたくらゐ忙しかつた我國の醫學も、近年になつて段々にその價値を認めるやうな傾向になつたといふことである。

私の温泉に對する一種の信仰は、子供の時分私共の郷里の田舎にあつた湯治の風習が、幼い頭にすつかり浸み込んでしまつた爲ではないかと思はれる。この頃の都會で育つた人、特に若い人たちには、温泉地といふものは全くの遊覽

地であつて、療養地としての温泉などといふものは想像も出来ないらしい。もつとも私たちの育つた田舎でも、この頃は以前のやうな湯治の風習が全く跡を絶つてゐる。僅か二十年くらゐの間に、私共の郷里の農村から、先祖代々傳つて來た湯治といふ言葉がすつかり影をひそめてしまつた。このことは、單に懷舊的の意味で惜しまれるばかりではなく、案外農村の一部の人々の保健の問題とかなり密接な關係がありはしないかといふ氣もする。

我國の農村の人々の労働の激しさは、都會の生活者には一寸想像の外であらう。都會の塵埃の中に住んでゐる人よりも田舎の清淨な空氣を吸つてゐるの方が健康であらうと思ふのは多くの場合間違ひであつて、此の頃の農村の人々の健康状態が著しく悪いことは、農民の健康の上に國防の基礎を置いてゐる一部の人々が喧しく論じてをられる通りである。中には筋骨が逞しくて丈夫さうに見える人も澤山あるが、そのやうな人でも年をとると急に老けるのであつ



て、田舎では五十歳といへば既に老人である。これは明かに労働の過度から來る現象であるが、労働の節制や營養の向上は、現在の状態では實際問題としては全く望み得ないことであらう。一寸温泉救國論めいた話になるが、二十年前までの私たちの田舎では、湯治の風習がそれに對する一つの對策として可成り役立つてゐたのではないかといふ氣がする。

この人達の湯治といふのは、極端な場合は米や蒲團をかついで、取入れ前の夏の暫くの農閑期を利用して近所の温泉へ行くのである。宿料といつても一日十錢か二十錢を拂ふだけで、後は自炊をするのであるから、この風習は中産階級の一般農家にも充分耐へられる程度のものであつた、それ程でない場合でも、自分達の子供の時の記憶では、何でも随分安かつたものである。私の父などは、温泉地に住んでゐながら、夏になるとよく子供達をつれて近所の他のYといふ温泉地へ行つたものである。それは私の家が温泉地へ出る前に農村生活を

をしてゐた頃、そのY温泉へ毎夏湯治に出かけた習慣が残つてゐたためらしい。そんな調子だから勿論行く宿屋はきまつてゐた。そしていつも二階を二間くらの借りて間の襖をとりのけ、障子を明け放して暮してゐた。直ぐ前は田舎の温泉町らしい狭い路に面してゐて、黒く古びた手すりにはいつも濡手拭がかけてあつた。そして着いた日の午後には「御見舞で御座います」といつてよく饅頭などが帳場から届けられたものであつた。其の後も二三日おきに、團子とかいなりずしとかいふ風のものや度々見舞に貰ふのであつたが、それが幼な心に餘程嬉しかつたと見えて、今でもおぼろげな記憶の片隅にそのやうな場面のいくつかが残つてゐる。

湯治の客は一日に五度も六度も湯にはひつて、上ると浴衣をひつかけて、黄色い畳の上にごろ／＼とねころんでゐた。中には湯から上つて、手拭で身體をふくと温泉の效目が弱ると言つて、濡れた身體の儘で椽側などにたゞずんで、



自然に乾くのを待つてゐるやうな人もあつた。その上一度の入湯といふのが又非常に長くて、よく浴槽の四角の一隅を占領して、頭を湯船の縁にもたせかけ、脚を他の縁にのせ上げて、身體だけを湯に浸しながら、うつら／＼と寝るでもなく覺めるでもないといふ風にして浸つてゐる人が多かつた。もつとも北海道の温泉地などでは、今でも時々はこんな風にしてねてゐる人を見かけることがないでもない。何時か、羅漢の像のやうな老人が、さういふ風にして湯の中にねそべつてゐるのに會つたことがある。かうしてゐると、長く湯にはひつてゐても酔はないが、それは人間は口や鼻からばかりでなく手脚の爪からも息をするからだ、その老人は眞面目な顔をして説明してくれた。

こんなに長くそして度々湯に入ることは、今の醫學から言つたら身體に悪いのださうである。一昨年の秋、少し健康を害したので、家族をつれて伊豆のI温泉へ暫く引越して行つたことがある。その時友人のお醫者さんにその點をくれ／＼も注意された。何でもその友人の親戚の人とかが、温泉へ療養に行つて湯に入り過ぎたために急に病狀を悪化してしまつたといふ話なのである。さういふことは、特に胸の病氣の場合などに多いやうであるが、一般の問題としても、餘り度々温泉に浸ることは、可成りの激勞になるらしい。さういふ話を思ひ合せて見ると、湯治の客たちがあんなに無茶な入湯のし方をして、それでゐてよく效くと言つてゐるのは、普段の勞働が想像も出來ないくらゐ過激に陥つてゐるので、この程度の入湯が丁度良い安息になるのかも知れない。

かういふ意味の湯治が一體本當に效くのかどうかは、誰も科學的にちやんと立證した人はないだらうと思ふ。しかし吾々の祖先が代々昔からあのやうに、此の湯治の習慣に一種の信仰をおいて來たところを見ると、そしてそれが永い間續いて來たところを見ると、矢張り何等かの意味で本當に效く點があるので



はなからうかといふ氣もする。一番よくいはれるのは、夏の間に湯治に行く  
と、その冬は風邪をひかないといふ話である。北海道の開拓移民のやうな恐ろ  
しい生活をしてゐる人々でも、夏の中に一廻り湯治に行くと、その冬は風邪も  
ひかず、移民生活につきもの、リウマチスも出ないといふ話はよく聞くこと  
である。一廻りといふのは普通は三週間を指してゐるやうであるが、二週間く  
らゐでも良いともいはれてゐる。もう少し前迄は登別の温泉などは、この湯治客  
で大分賑つたといふ話であるが、この頃の農村の人々にはその程度のさゝやか  
な贅澤さへも許されなくなつたやうである。それでも登別などでは、今でもそ  
の習慣が残つてゐて、土地の一流の大きい宿屋でも湯治客のために特に安く、  
例へば一日八十錢くらゐでも暮せるやうな制度が残つてゐる。

信州の山の温泉、例へば發哺のやうな所では、十年前迄は確にこの湯治の客  
が、可成りあつたのであるが、今はもう多分ずつと減つてしまつたことだらう

と思はれる。昨年東北の或る温泉へ行つた時聞いた話では、今でもごく邊鄙な  
温泉場には、此習慣が残つてゐるさうであるが、少し汽車の便の良い所では殆  
ど絶えてしまつたといふことであつた。夏の農閑期は登山や避暑の學生達とか  
ち合ひ、冬の休み時はスキー客におされて、もはや農村の湯治客などの介入す  
る餘地は、可成りの邊鄙な山の温泉地にも残されてゐないやうである。これは  
單に直接の經濟的問題ばかりでなく、「都の人」が澤山來るやうになつては  
田舎の特に老人たちは、そんなところへ割り込んでも、何となく「卑下」され  
て落付いて逗留などは出來なくなるのであらう。

とにかくかういふ意味での湯治の制度が、一番大規模にそしてよく利用され  
てゐたのは、何といつても別府であらう。もつともそれも歐洲大戰迄のことで  
あつて、近年はずつとすたれてしまつたことは勿論である。二十年前には、別  
府の宿屋では、初めに女中がよく「木賃にしませうか、それとも旅籠はたごになさい



ますか」と聞きに來たものであつた。旅籠といふのは普通の食事附の泊りで、木賃といふのは自炊の制度であつた。部屋代は疊一疊についていくら、蒲團はいくらといふ風にきめてあつて、自炊といつても、御飯と簡単な惣菜くらゐは宿屋で賣つてゐたので、それで食事を済ますことも出來た。勿論臺所は棟毎にあつて、普通の臺所道具は貸すやうになつてゐたと思ふ。かういふ點では、此の木賃の制度は、今のホテルなどよりもつと合理的なものであつた。多分昔の温泉宿といふものはこの木賃が主であつて、旅籠の客といふのは、温泉宿へ來て「旅籠」と同じやうにやつてくれといふ特殊の客であつたのだらうと思はれる。高等學校時代の夏休みに別府へ行つた頃は、まだかういふ湯治客が澤山來てゐた。狭い廊下が長く續いてゐて、その一側は中庭に面してをり、他の側に澤山同じやうな部屋が並んでゐた。そしてその中に年寄りだの、案外若い逞しい體格の男だのが、澤山居たやうな場面が記憶に残つてゐる。

別府でも加賀の温泉などでも、かういふ客が目立つて減つて行つたのは、いふ迄もなく、歐洲大戰中の好況時代からである。一流の宿屋は都會の金のある客から、二流の宿屋は近村の遊蕩客からそれぞれ「浮いた錢」を儲けることが習慣になつては、湯治客などの介入する餘地がなくなつたのは當然である。そして、宿屋の主人同志は、只じつとしてをられない氣持から、互に無理な増築をし、調度を贅澤にして、段々にその經營を自ら困難にして行つた。しかし襖の引手に朱總をぶら下げるやうな趣味が、さういつ迄も通用する筈は勿論なかつた。一時のこの時代が過ぎると、これ等の經營者たちは皆その設備に負けてしまつた。そして一部の人たちは所謂團體客を主として迎へるやうに急に準備をととのへ、他の人々は温泉地を益々遊廓化する方向に進んで行つた。この後の傾向の方が農村の保健の問題に關しては、湯治制度の衰退以上の直接の弊害を齎したとはいふ迄もないことである。私の狭い見聞の範圍内では、この兩者



は共に經濟的には失墜の途上にあるやうである。その中にあつて、比較的成功したのは、所謂家族連れの客を主とするやうに經營の方針を進めて行つた少數の人々である。世の中が、せめて自分の家庭の中にでも據り所を持つより仕方なくなつて來たのと歩調を合せて、早くこの經營方針をとつた人々は先づ無難のやうであつた。いづれにしても一旦亡びた湯治制度には、先づ復活の見込は立たないやうに見えた。

時代と共に温泉も随分變つて來た。そして今度の事變といふ未曾有の國難に遭遇して、温泉がどういふ風に變化するかといふことは注目してゐて良いことと思はれる。伊豆の或る温泉などでは、旅館が五つばかり傷病兵の臨時療養所となつて、白衣の勇士が澤山來てゐる。そして秋晴れの空の下で、廣場で町の子供たちと戯れてゐるといふ朗かな風景も見られる。傷には矢張り温泉が一番良いと見えて、これ等の勇士たちはどん／＼治つて歸つて行くといふ嬉しい話

である。そして又一方では、この同じ温泉地は、戦時景氣の餘波を受けたためかどうかは分らないが、なかなか繁昌もしてゐるやうである。

歐洲大戦の時は、温泉にはその遊興地だけが残されたのであるが、今度は流石にそんな傾向は前ほどには見られない。そして一方に療養地としての温泉の效能も又新しく認められて來たやうである。しかしそれは昔の湯治とは少しく意味のちがつたものゝやうに思はれる。もう一二年もしたら、この新しい温泉雰圍氣の色彩がもつとはつきりして來ることであらう。(昭和十三年九月)



民族的記憶の名残



もう四年前のことになるが、考へて見れば、寺田先生の亡くなられた年の夏のことである。

先生の最後の隨筆集『螢光板』を貰つて、ひとわたりずつと讀んで行つたところ、  
「冬夜の田園詩」といふ短い文章のところ、私は妙に底知れぬしみぐとした感じにうたれたことがあつた。

それは三頁にも足らぬ短いものではあつたが、その中に先生の幼かつた頃の土佐の民族詩的情景が、いかにもあり／＼と描き出されてゐた。

冬の夜長に孫たちの集つてゐる燈下で夜なべ仕事をしながら、山中の狸どもの舞踏會の話をする老婆の姿や、夕闇迫る田圃道で子供たちが原始民謡風な歌



を唄ひながら、その唄におびえて一せいに駆け出すといふ話など、とりとめもないやうな事柄の叙述の中に、美しくも亦物怖しい童話詩的な雰圍氣がよく語られてゐた。

そして先生は、その幼い頃に郷里の「田園の闇に漲つて」ゐたところの「滑稽なやうで物凄いやうな、何とも形容の出来ない夢幻的な氣持」を、民族的記憶とでもいふやうなものではなからうかといつてをられた。

かういふものを讀んで、その感情がひた／＼と身に迫つて感ぜられたのも、私どものやうに、田舎に育つたものの特權であらう。

私どもの育つた北陸の片田舎には、ついこの二十年くらゐ前でも、かういふ民族的記憶による特殊の情緒が、人々の日常の生活の中に深く浸み込んで残つてゐた。

其處には、現在の自分等の物の考へ方のやうな思考の形式は、まだはひつて來てゐなかつたやうな氣がする。或はもつと極端にいへば、喜怒哀樂の情までも現代の若い都人士の喜怒哀樂とは異つてゐたといへるかもしれない。

文藻豊かな私の友人の一人が、いつか西洋のスポーツと日本の競技との底に流れる感情を比較して、その間に根本的なちがひがあるといふ面白い意見をきかせてくれたことがある。

西洋のスポーツに伴ふ聲は、たとへばオリンピックの放送で聞いた歡聲のやうに、胸一杯に吸つた空氣が期を得て爆發する聲である。かういふ聲は日本古來の競技にはない。日本の競技に伴ふ聲の代表的なものは、劍道の氣合のやうに、腹の底から絞り出す裂帛の聲であるといふ話なのである。

その話をよく味つてみると、なる程日本の競技には、劍道の掛け聲のやうな極端な場合でなくとも、いづれの場合にも必ず何處かにこの裂帛の調べがあるやうな氣がする。



さういへば、私たちの子供の頃の北陸の農村の生活を思つて見ると、其處には、現在吾々が知つてゐるやうな歡聲が聞かれる機會はなかつたやうである。一番それに近いものを拾ひ出してみるとすれば、花相撲で村一番の名力士が、堂々と相手を押し切つた場面などを想像して見ることが出来る。しかしその時に揚がる聲にも、何處かに勝鬨めいたものが雜つてゐて、今日吾々が、テニスコートスコートの側で大きく、あの輪廓の圓いそして大きいながらに軽いところの現代の聲ではなかつた。

私はこの話を、昔の日本人と今の日本人との間には、喜怒哀樂の感じ方にまだ差があるといふことの一つの例として面白く聞いた。それにもつと重大なことは、この裂帛の氣合といふものが、ひよつとすると、今日やかましく論せられてゐる「日本精神」の一つの大切な要素をなしてゐるのではないかといふ點である。

勿論すべてのその種の議論がさうであるといふわけではないが、或る人々の訓詞などをラヂオを通じて聞いてみると、その語調には勿論のこと、論旨の基調にも、この裂帛の氣合が脈々と流れてゐるやうに私には感ぜられることが多い。

ところで、かういふ裂帛の氣合といふやうなものが、日本人の生活の奥に初めからあつたものか、或は案外近頃になつてはひつて來たものか、例へば徳川時代の武士の病的な精神生活などから醸し出されたものではなからうかといふ點になると、私には全く分らない。しかしさういふことも、一つの面白い問題になるのではなからうかといふ氣はする。

おぼろな記憶の中から、ピアノは勿論のこと、電燈もなかつた頃の北陸の農村の生活を探し出して見ても、その中から、今日やかましくいはれてゐる「日本精神」のやうなものが一つも拾ひ出せないことも、私にとつては非常に不思



議なことである。

なる程、あの頃の農村の生活の中では、今日吾々が都會の生活で知つてゐるやうな現代の聲はきかれなかつたことは確かである。しかしその田園の闇にだけこんでゐた吾々の祖先の歌は、寺田先生の言葉を借りれば「それは萬葉集などよりはもつと古い昔の詩人の夢をおとづれた東方原始民の詩であり歌であつた」ものの燃え残つた弱い炎であつた。そして、その中には今日の所謂日本精神といはれるものは、少くとも直接の姿でははひつてゐなかつたやうに思はれてしやうがない。

かういふ意味で本當に日本的なものは、今日一部の少數の土俗學的な學問の研究者たちの手にゆだねられて、要路の人人の注意などは餘り惹いてゐないやうに思はれる。そしてその方面の研究者たちは、比較的不遇な立場にある人が多いにも拘らず、随分熱心に研究をつづけて、澤山の資料が集つてゐるやうである。

その方面の研究は勿論、この消え去りつつある吾々の祖先の生活の姿をよびとどめる爲に、有力なたすけを與へるものであらう。しかしこの仕事は、いはゞ、流れの上に書いた文字を捕へようとするやうな性質の仕事である。さういふ性質の仕事であるとする、それは單に、土俗學や民俗學の方面の科學的研究だけで出来るものではなくて、文學や音樂などの所謂藝術の力をも多分に借りる必要があるであらう。「グリムやアンデルゼンは北歐民族の『民族的記憶』の名残を惜しんで、それを消えない前に喚び返してそれに新しい生命を吹込んだ人ではないかと想像される」からなのである。

寅彦先生の「冬夜の田園詩」を讀んでからもう數年になる。

その間に私はこの方面の本を氣にかけながらも、何分専門の仕事とは縁遠い話なので、つい探してみる程のこともなく過ぎて過ぎた。ところが今度何氣なく柳



田國男氏の『木綿以前の事』を読んで見て、この本が、或る意味では矢張り吾等の祖先の民族的記憶を探らうとする試みの一つであることを知つて、大變なつかしい氣がした。

柳田氏の民俗學的研究のことを、今更事新しく述べるのも妙な話であるが、この本の一つの新しい試みは、何でもない只の昔の日本女性の姿といふ非常にむつかしいものを、俳諧の中から探し出さうとした點にあるのである。

俳諧といつても、詳しくいへば蕉風の連句なのである。この連句といふそれこそ純粹に日本獨特の文藝であり、且つ高度に發達した本當の意味での日本精神の産物を資材として、その中から昔の普通な女の姿、即ち只何事もなかつた吾等の祖先の家庭生活の相を喚び返さうとする試みは、如何にも卓見といふことが出来るであらう。

もつとも卓見とはいふものの、この仕事は生易しいことではない。「一流の佳

人と才子、又は少なくとも選拔せられた或男女の仲らひを叙べた」文學からは多くを期待することをせず、今迄多くの人々が比較的見逃して來た此の連句をとりあげて、その戀愛とドラマとを禁じた表六句のわびた暖簾の蔭に、「紅紫とりぐ」の女の歴史が畫かれて」ある姿を見、「この無數無名の二千年間の母や姉妹が、黙つて參與してゐた」歴史に一點の光を與へようといふのだから、なか／＼の大事業なのである。

柳田氏の力とでもいふべきものは、かういふ仕事の遂行に、如何にもその處を得て發揮されてゐるやうである。

分ぶんにならるる 嫩よめの仕し合あ 利 牛  
はんなりと細工に染る 紅うこん 桃 鄰  
鐘 持 ち ばかり 戻る 夕月 野 坡

といふ劈頭に引用されてゐる『炭俵』の一節からは、新しい木綿着物のそれも



紅をばかしたうこん染の袷か何かを着てゐる初々しい花嫁の姿を描きとつてある。そしてさういふ着物が、勝手な染めを許さなかつたそれ以前の麻の不斷着の生活にどういふ變化を齎して來たかといふ重大な問題に觸れてある。

「はんなりと細工に染る」木綿着物からは、まる／＼と着ぶかれて、健康さうな頬を輝かしてゐる當時の農村の娘たちの生活と、更に進んでは、その感情までが讀みとられるやうな氣がするであらう。

この本は、日本の昔の衣食住に關する色々な題目の隨筆の集成といふ形で出來上つてゐる。木綿の話については、瀬戸物のことが出て來る。「小家の侘しい物の香」の源をなす木の御器の生活に、白くて靜かな光のある瀬戸物がはひつて來て、「前には宗教の領分に屬して居た眞實の圓相を、茶碗といふものによつて朝夕手の裡に取つて見ることが出来る」やうになつた時の人々の幸福が、それには清潔といふ要素が庶民の生活の中へもはひつて來たことを含めてゐる

のであるが、その影響がよく述べられてゐる。

暗いすすけた臺所と茶の間との兼用の部屋、といふよりも家の片隅といつた方がよいやうなところに、老媪が火吹竹をもつた姿が、丁度家の造作の一つのやうな形にうす暗く浮び上つてゐる。その側に、唯一のはつきりとした輪廓を示すものとして、四五枚の瀬戸物が白く光つてゐる。さういふ最もありふれた情景、それが本當の農村の生活の姿であるが、それを文筆の題材としてとりあげたものが、考へて見ると意外に少いやうである。

『卯辰集』にあるといふ加賀の山中温泉の三吟歌仙のうちからも、次の一連が抜き出してある。

霞 ふる 左の山は菅の寺 北 枝

遊女四五人田舎わたらひ 曾 良

落書に戀しき君が名もありて 翁



かういふ從來比較的問題にされてゐなかつたものの中から、柳田氏は「田舎わたらひ」をする遊女といふ取るに足らない一群の人々の生活をとりあげてゐる。

田舎わたらひといふ語は、源氏の夕顔の巻にもあるさうであるが、京のこの種の人々は、「もうあの頃から、秋の收穫の豊かな頃を窺つて、農村を稼ぎまはつて儲けて還る色々の道を知つて居た」のである。

かういふ瑣細な社會現象も地方文化に及ぼしたその刺戟といふ觀點から見る時は、可成りの重要な意味が出て來るであらう。その上「國の全貌を昔のままに無く、好くも悪くも新しいものにした外部の力、空に吹き散る花粉や胞子の如きものの中に、曾てはこの極めて溫柔なる女性の一群も參加して」ゐた事實は、單なる文化の媒介物としての問題許りでなく、その花粉の齎した匂ひを嗅ぐことによつて、嘗ては當時の田園の生活に時折差した色彩の光をも感ずるこ

とが出来るのである。

『木綿以前の事』をぼつ／＼と讀みながら、とりとめもなく、昔の夢に浸ることによつて、私は數日の日を思はず楽しく送ることが出来た。

かういふ學問が、現在のやうに主として官學畑以外の人々の手によつて開拓されて行くやうでは、まだ／＼日本の文化もさう威張れたものではないといふ氣がする。(昭和十四年九月)



S

の

話



Sは私の高等學校時代の同期生で、支那の留學生であつた。Sといふのも勿論日本流に呼んでの名前であつて、本當の發音ではどういふのかは知らないが、とにかく此處ではSといふことにして置く。

Sは奉天の男であるが、父は張作霖配下の官吏で、可成り羽振りのよい人だつたといふ話であつた。それでSもいつもきちんとした身なりをしてゐた。身なり許りでなく、風采も立派だつたし、それに珍しく頭の良い、そしてしつかりした男だつたので、他の留學生たちをとかく馬鹿にし易い生意氣盛りの高等學校の學生たちも、この男には内心一目おいてゐるやうであつた。

さういふ一種の漠然とした友人たちの期待にたがはず、其の後のSの生涯は



誠に多奇を極めたものであつた。Sは日本の高等學校を出ると、飄然として獨逸へ行き、そこで勉強を續けてゐたが、その中滿洲へ歸つて、一躍中學校の校長に拔擢されたといふ噂が先づ傳はつて來た。さうかと思ふと間もなく郭松齡の反亂に加はつて、外交部長として活躍してゐるといふ記事が新聞に出たが、其の後杳として消息を絶つてしまつた。ところが半年位したらひよつくり日本へ現はれて、又新聞を一寸騒がしてゐた。そしてその後は、國民政府へ參加して、蔣介石の參議になり、濟南事件の頃は日本へも蔣介石の密使として來たことがあつたさうであるが、もう十年位前からすつかり姿を消してしまつた。多分もうとつくに死んでしまつたことと思ふが、今迄Sが生きてゐたら、きつと今度の事變の後始末などには、新政府にとつて可成り頼もしい要人になつてくれただらうと思ふ。Sは通り一遍の御世辭でなく日本が好きで、よく支那は日本にたよつて白人の侵蝕から自國を守らねばならないと言つてゐた。それには

Sの日本に於ける高等學校時代の生活、即ち金澤に於ける生活が大變有力な原因になつたのではないかといふ氣がする。Sは金澤で、或る士族の舊い家に下宿してゐて、そこで心から温い待遇を受けてゐたのであるが、その親情が餘程身に沁みて嬉しかつたと見えて、其の後偶然の機會でSに會つた時に、よくその話をしてゐた。

私はSと高等學校の三年間、同じ級にゐて、可成り親しくしてゐた。その級には、Sの外に二人の支那の留學生がゐたが、Sは斷然成績もよく、日本語も巧みであつて、初めのうちは私などは留學生だといふことに氣がつかかなかつた位であつた。

どういふものかSは私には非常に親しみを感ぜたらしく、入學間もない頃からよく色々の相談をしたり、打ち明け話をしてゐた。何分高等學校時代の何にでも感激し易い年代だつたもので、私もよく夜おそく迄、Sの靜かに話



し續ける支那の、特にその頃の張作霖治下の滿洲の話を書いたものであつた。

Sは下宿では、いつでもさつぱりした紺緋の着物に對の紺の羽織を着てゐた。そして端然として大きい机に向つてよく本を讀んでゐた。Sの居た家は所謂素人下宿で、金澤によくある細い格子のついた舊い家であつた。下宿人はS一人で、全く家庭の一人として待遇されてゐた。舊士族の未亡人らしいお婆あさんはいつも「Sさんは感心な人や、よう勉強なさりみす」と褒めてゐた。Sはそれで、一度も下宿の不平を言つたことがなく、この三年間の日本に於ける生活は、Sにとつては、或は生涯でも最も平穩なそして幸福な生活であつたのかも知れないと後になつて思ひ合はされた。

高等學校の三年の終り頃になると、誰もが大學の入學試験の準備に忙しくなる。妙な見榮から必要以上に學校を怠けてゐた私などは、それこそ足下から鳥が立つやうなあわて方をして、Sとゆる／＼東亞の將來などを論じてゐる暇はなくなつてしまつた。最後にSが皆と別れて一旦故郷へ歸るといふ數日前、一寸「僕は感ずるところがあるから、獨逸へ行くかも知れない」と洩してゐたのも匆々に聞き流して別れてしまつた。

Sとは其の後すつかり文通も絶えてしまつた。私は田舎から急に東京へ出たので、色々氣をとられることが多く、いつの間にかSのことなどはすつかり忘れてしまつた。そのうちに高等學校時代の級友から、Sは伯林へ行つて經濟か何かさういふ風なことを勉強してゐるさうだといふ話を聞いて、Sには或はそつちの學問の方が國へ歸つて直ぐ役に立つのだらう位にぼんやり考へてゐた。

Sとの交渉がこれだけで濟めば、それだけの話であつた。たとへ其の後新聞で郭松齡の事件や何かで、Sの名前を見ることがあつたとしても、「矢張り尋常では納らない男だつた」位で濟んでゐたところであらう。ところが其の後數年して、私が大學を卒業して暫らくしてから、妙なところで偶然Sに會つたので



ある。それは東北線の寢臺車の中であつた。丁度淺蟲温泉で或る會議があつて、それに出席して歸る途中の車中のことであつた。朝、寢臺から出て、顔を洗つて歸つて來ると、もう取片づけられた寢臺車の私の席の前にSが坐つてゐた。

餘り意外なことなので私も一寸我が眼を疑つたのであるが、Sも正にその通りに愕いてゐた。聞いて見ると、前夜一晩お互にちつとも知らずに向ひ合ひの寢臺の中でねてゐたのである。誠に意外な奇遇ではあつたが、もつともそれは一九二七年の秋のことで、Sが日本へ來てゐることには不思議はなかつたのである。といふのは、その二年前の一九二五年の春に、有名な郭松齡の事件があつて、張作霖の部下の將軍の郭松齡が、馮玉祥と結んで張作霖に反旗をひるがへし、一時は奉天迄も危かつたことがある。結局最後のところで郭松齡の軍が敗れて、郭は苛い目にあつて殺されてしまつた。その時郭松齡の軍の外交部長として活躍したのがSであつて、危く逃れて日本へ亡命して來たといふ記事が

新聞に出てゐたことがあつた。この東北線の中での奇遇といふのは、確かさういふ記事を読んでから一年位後のことで、Sはその事件以來ずつと日本の何處かに隠れてゐたのである。

Sは元氣であつた。そして五年ぶりの邂逅ではあつたが、普通りの眞面目な好青年で、そんな恐ろしい場面をくぐり抜けて來た男とは思へない位快活で、親しい調子で色々私のことを聞いた。そして何の心配もなく物理の研究などをしてをるといふことは非常に幸運なことだと感謝してゐなくちやいけないなどと、少し大人ぶつた口もきいてゐた。それから「なにもう十年もすれば、支那もよくなるだらう。そしたら北京の大學へでも少し遊びに來て下さい」などと冗談を言つて、喜んでゐた。

この時は私は途中で一寸用事があつて下車することになつてゐたので、Sとは一時間位しか話す機會がなかつた。Sは東京の住所は言はなかつた。そして



近く南京の方へ行くから、手紙は上海の商務印書館の某氏氣付にして出してくれば届くとそのアドレスを教へてくれた。丁度私はその時から半年位後に歐洲へ留學することになつてゐたので、その話をする、大變喜んで、是非上海で會ひたいから、船が決つたら教へてくれと繰り返し念を押して、再會を約して別れた。

その次の年の三月五日に、私たちの船は上海へ着いた。丁度一九二八年のことで、漸く南京を手に入れた國民軍の蔣介石が北伐軍を再整備して愈々最後の決戦をしようといふ時であつた。張作霖は大元帥として北京に頑張り、ロシヤと事を構へるし、國民政府の方では漢口の英租界を奪還した勢で排英騒ぎが續いてゐたり、とかく物騒な頃であつた。

初めての旅行で、それに初めて外國の土地を踏む上海のことであるから、只

さへびくくしてゐるところへ、かういふ時機なもので、私はSが迎へに来てくれる迄は上陸しないで待つことにした。ところが、どうした行きちがひか、Sはちつとも迎へに来てくれないので、到頭同船の人達と一緒にランチで租界まで行くことにした。

ランチの中で同船の人が色々注意をしてくれた。その人の友人が、前年上海で俥に乗つたところが、車夫が段々共同租界から離れて、支那街の方へ曳き入れさうにするので、驚いて車を止めさせて巡査に道を聞いた。そしたら車夫が間違つたと言つてすましてゐたさうである。それで改めて嚴重に行先を言つて又乗つたのであるが、いつの間にか支那街に曳き入れられて了つた。下りようとする、途方もない澤山の賃金を吹きかけて来て、あれこれ押問答をしてゐるうちに、氣がついて見たら周圍には澤山の車夫がいつの間にか取り巻いてゐたさうである。驚いて直ぐ近くの店屋にとび込んだのであるが、その店の男も



日本人と見るや否や、とてもつつけんどんに出て行けと言ふ。危機一髪といふところで、一人の強さうな車夫がやつて来て救つてはくれたものの、結局その車夫に莫大な金をとられたといふ話なのである。「一人で俥に乗れば、まあ裸にされること位は覺悟してゐなきやいけませんよ」と、その人は眞面目な顔をして注意してくれた。

波止場へ上ると、どこの港もさうであるやうに、雑然とした大きい建物が澤山竝んでゐて、その蔭から瘦せた車夫が群り出て来て、何となく不安になつた。丁度排英騒ぎの最中だつたもので、武装の英國兵が小銃弾を竝べたバンドをたすきに掛けて歩き廻つてゐるかと思ふと、頭巾を頭に卷いた印度兵が小銃を持つて立つてゐるといふ時だつた。初めて外國の土地を踏む者にとつては萬事が苦手で、とにかく街の地圖を何とかして手に入れなくては、それこそ手も足も出せないやうな氣持になつた。ところがどうも波止場の近くではさういふ物を

賣つてゐる店も見當らぬやうである。空氣は濁つて靄がかかり、大きい建物の間に見える狭い露路が薄氣味悪い。とにかく日本人の澤山住んでゐる街の方へ行かうぢやないかと、同船の人々と一緒に案内されて行くことにした。實は商務印書館へ行つて、Sを探して貰ふつもりだつたのであるが、自動車と人力車とそれに汚い衣服の支那人とがごつた返してゐる街の姿を見ると、無暗に不安な氣がして、どうも一人離れて單獨行動をとる勇氣が出て來ない。

やつと日本人街へ行つて、地圖を一枚買つて、さてよく見ると、大體ながら上海の姿がおぼろに浮んで來るので、地圖といふものは有難いものだと思つた。よく見ると商務印書館といふのは直ぐ近くである。それで皆の休んでゐる間に一寸馳けて行つて見ると、何程の事もなく直ぐ分つた。立派な七階か八階建のビルディングであつた。今度の事變であの書館の名を新聞で見る毎に、ああいふ繁華な街の眞中の大きいコンクリートの建物を占領することの困難さを



しみとくと思ひ見るのである。商務印書館は見るだけで直ぐ引返すことにして歸りは人力車に乗つて見た。もつともこの路は今馳けて來たばかりの所で知つてゐるのであるが、俵に乗る訓練をするつもりで乗つて見た。「日本堂前」と書いて見せると、「文路」ときく。頷いて見せるとすぐ走り出した。俵の上で地圖をひろげて見てゐると、この位の速力ならば充分地圖の上で、走つてゐる路をたどれることが分つた。

これで注意さへしてゐれば、一人で波止場まで歸れる自信がついたので、一同に別れて一人で又商務印書館へ歩いて行つた。そしてS宛の手紙の氣付になつてゐる某氏の名を紙に書いて見せたら、七階かの事務室へ連れて行かれた。そこでマネジャー風な比較的若い男に會つた。それがSの親友なのであつて、日本語も分り、暫くSの話をしてゐるうちに、もうすつかり前の妙な不安が消えてしまつた。その人はSの所へ電話をかけて聞いてくれたが、丁度Sは私と

行きちがひに船へ行つたことが分つた。Sの宿は××路の某旅館といふのであるが、まあ船へ歸つて待つてゐた方がよからうと勧められて、俵をやとつて貰つて波止場へ歸つた。今度は安心して車上で地圖を擴げて見てゐると、日中注意して歩けば何處へ行つても大丈夫らしいといふことが分つた。丁度ランチの都合が悪かつたので、思ひ切つて地圖をたよりにぶら／＼××路の方へ行つて見た。念の爲にと、交叉點毎に棒をもつて立つてゐる交通巡査らしい男に、××路と書いた紙片を見せると、何處でも決つたやうに手で教へてくれた。それが地圖と一致してゐるので安心して、段々深い街の方へ入つて行つた。そのうちに、長い旗が兩方から殆んど街を蔽つて垂れてゐるところへ出た。赤か黄色の旗で、文字を染め抜いたものである。大抵の旗には「大減價」などといふ文字があつた。

そのうちに急に街が狭くなり、旗は益々多くなる。そしてナイトキャップの



やうな帽子をかぶつて胸の前で懐手をした支那人が澤山立つて、こちらをじろじろ見てゐる。餘程引き返さうかと思つたのであるが、知らぬ顔をして、なるべく引つかゝりの出来ないやうに注意しながら行くことにした。到頭その宿屋へたどりついて中へはひつて見たのであるが、内部の様子がすつかり變つてゐる家なので氣味が悪かつた。Sの名をかいた名刺を見せると、何か早口に喋りながら、指を四本出した。多分四階のことだらうと思つて、すまして、その實内心はひどくびく／＼しながら狭い階段を上つて行つた。四階に汚い年寄りの人相の悪いボーイがゐたので、又名刺を見せると、結局まだSは歸つてゐないことが分つた。それで自分の名刺を渡して歸ることにした。

歸りはもうすつかり平氣になつて、地圖の上で目印をつけながら、路を折れ曲つては、薄汚い支那街をぶら／＼見物しながら波止場へ歸つた。夕方になつてもう大分薄暗い。そこへ、軍樂隊を先頭に一中隊ばかりの英國兵が威風堂々

と行進して來た。それが過ぎると、赤い大型自動車に英國兵が乗り、先頭に機關銃風のものに乗せて走つて來る。何時暴動が起きるかも知れないので、警戒してゐるのだといふ話であつた。

船へ歸つてねようとしてゐたら、Sからの手紙が來た。宿へ歸つて見たら、君がこの宿屋まで訪ねて來たことを知つて非常に驚いたと書いてあつた。

次の朝は六時に起きた。

黄浦江の水と對岸の土手が薄鼠の一色に見えるやうな朝だつた。

郵船の船は、上海の波止場からずつと下流の方に碇泊してゐるので、上陸するには九時のランチ迄待たねばならなかつた。もつとも地圖を見ると、この碇泊地點の對岸には電車が通つてゐるので、舢板<sup>サンバン</sup>で對岸迄行けば、ランチを待つ迄もないのである。舢板は前日からもう澤山船の周圍に群つてゐるのである



が、誰も餘り乗らないやうである。一つ革命の志士を驚かしてやれと良くない考へを出して、船のボーイに談判して貰ふと、對岸迄二十錢だと言つてゐるといふ話であつた。それで思ひ切つて舳板に乗ることにした。これは危険なものだとは聞いてゐたのであるが、果して本船を離れると、何か大聲で言ひ出した。言葉は勿論分らないが、どうも五十錢と言つてゐるらしい。とにかく向う岸へつけると手眞似をすると、岸近くへ來ながら、どうしても舟を岸につけない。そして又何か早口に疍高い聲で喋り出す。今度はどうもワンダラーと言つてゐるらしい。どうにも始末にをへぬので、洋杖をもち直して、こつちも大聲に呷鳴りながら二十錢見せると、とても怒つたらしく、又中流の方へ舟を漕ぎ出してしまつた。すると他の舳板が三四艘近くへ漕ぎ寄つて來て、何か大聲で言ひながら笑つてゐる。「やれ〜」とでも應援してゐるらしい。到頭降參して五十錢を見せると、やつとそれでも岸の方へ漕いで行つてくれた。岸へ來ると一間位手前の所で金をくれと言ふ。それで舳に銀貨を並べて置いて舟を漕がせながら、岸に近づいた途端にとび上つて、やつと對岸にたどりついた。もう舳板はこり〜である。

此處で電車に乗らうとすると、印度人の大きい巡查が立つてゐる。やれ〜と思つて、そばへ行つて、「electric car は何處で停るか」と流暢なつもり英語できいて見た。そしたら、人の良ささうな大きい印度人が、まるで私の身體をかかへるやうな恰好をしながら、「Please speak English」と失禮なことを言つた。後になつて切符を買つて見たら分つたのであるが、tramwayといはねば通じないらしい。

それでもやつと電車には乗れた。頭等と三等と真中で仕切つてあつて、三等の方は支那人許りまるでぎゆう〜詰めになつてゐた。頭等と三等とは一區一仙しかちがはないのであるが、頭等の方はまるですいてゐた。これは支那人を



除外する爲に英國人が考へたことかも知れない。丁度學校へ通つてゐるらしい英國人の女の子が居たのできて見たら、親切に降りる所を教へてくれた。

前日の宿屋へ行つて見ると、Sは丁度起きて顔を洗つてゐる最中だつた。室の兩隅にベッドが二つ置いてあつて、天蓋風な形にカーテンがついてゐる如何にも支那風なベッドであつた。他には小さい卓と椅子が二つと洗面所とがあるだけで、極めて簡単な室である。ベッドの下にスリッパが二個竝べてあつて、Sはそれだけで暮してゐるらしかつた。

勿論Sは大變驚いて、そして喜んだ。後によく話をきいて見たら分つたのであるが、Sは上海でも常に身邊の危険があつて、安心して話の出来る友達などは餘りなかつたらしいのである。とにかく外へ出ようといふことになつた。Sは誰か國民政府の要人に會つて見たいかときいたが、私はそれよりも少し買物をして支那料理の美味いのを食べて見たいと思つてゐたので、一緒に支那街を

少し散歩した。狭い汚い街には乞食が一杯ゐた。「みんな張宋昌の爲に、あんなになつて流れて來たものだよ」とSは言ふ。買物といつても前日目星をつけておいたもので、小さい木彫りの印を一つ買つただけである。毛のやうな細い線で一面に山水風の繪をぎつしり彫り込んだものが一圓五十錢であつた。Sがきいて見たら、これを一つ彫るにはまる／＼一週間はかかるといふ話だつた。勞銀の廉い國でなくては出來ない美術品である。

晝食に、先施公司の四階の小さい室で、二人切りになつて、支那料理を食べながら老酒をのんだ。Sは珍らしく酒に酔つて大分氣焰をあげた。郭松齡の事件の詳しい話も此處で初めてきいた。Sの話によると、革命が成功しない理由は、いつでも軍閥に裏切られる爲で、今度の北伐が度々中絶するのも、軍閥の裏切りが頻々とある爲だといふことであつた。

『郭さん(郭松齡)の時もさうだつた。新民へ着く手前の鐵橋が破壊されてし



まつたので、午後四時頃から歩いてやつと新民に着いたのが夜の八時だった。すぐ軍事會議を開いたが、前線からは「いくら攻撃しても敵は退却しないから駄目だ」といふ通知許りが来る。そんな筈はないので、これは少し變だぞとは思つたが、明朝迄は大丈夫だらうといふので、床についたのが夜の十二時だった。ところが夜明けの四時頃になると、既に形勢は急變してゐる。郭さんを探したが居ない。今し方、二度も貴方を探してゐたが、見當らないので出かけてしまつたといふ話だった。もうその頃になると、何も彼も混亂してしまつて、誰が何處にゐるか少しも分らない。要するに前線が買収されてしまつたのです。

實際誰が頼りになるかちつとも分らないのが今の支那の實情ですよ。その朝にはもう張作霖の騎兵が一里位迄迫つて來たので、僕は文官を全部つれて日本總領事館に行つてあづけ、自分は前線へ引き返さうとしたのだが、もう

すつかり包圍されてしまつてゐて、どうにもならなかつた。』

Sは盟友の郭松齡があんな残酷な目に會つて殺されたのに、自分一人總領事館へ逃げ込んで助かつたのが、餘程寢覺が悪いらしく、色々と當時の事情を話して自分自身に言譯をしてゐるやうに見えた。張作霖の方では、どうしてもS等を捕へようとして、なか／＼圍みを解かない。中には「馬賊を使つて領事館を焼打してしまへ」と張作霖に入れ智慧をする者もあるといふ通信が同志の方から来る。遂に意を決して、夜の二時頃穴から逃げ出して、日本人の警官に化けて奉天へ自動車で落ちのび、二日の後にはもう日本へ逃れるといふ際どい藝當をして、やつと命は助かつたといふ話であつた。

『今は蔣介石の參議といふことになつてゐるが、別に何の用事があるわけでもなく、只ぶら／＼してゐるんです。實は一昨日南京から歸つて來たのだが、二三日したら又天津の方へ行くつもりだ。そして十日もしたら又日本へ



行つて、暫く滞在し少し勉強をしようと思つてゐる。

孫先生の死後は、國民政府にはまるで人材が無いんだ。蔣介石一人だけは、眞面目で本氣に働いてゐるが、後の連中は毎晩マージャンをやつて夜更しばかりしてゐる。こんなことでは、北伐は成功しても革命は成功しないだらう。もう支那にゐては、人ばかり訪ねて来て、會はねば評判が悪くなるし、會つて見てもまるでつまらぬ話ばかりして只時間を潰すだけのことだ。皆がマージャンをやるので、たまには中に入らないと工合が悪いし、そんなことで、時間は潰れるし、頭は疲れるし、とても駄目だ。早く日本へ行つて、暫く考へて來ないとまるで何も出來やしない。

北伐も今度こそは成功しさうだ。今の豫定だと三ヶ月の後には北京が落ちるだらう。(事實、この年の五月に濟南事件などがあつて北伐が一寸頓挫したにも拘らず、三ヶ月後の六月には北京が落ち、張作霖の爆死といふ事件があつた)しかし今は漢口の共產政府とも絶縁してゐるし、國民政府も、軍閥と共產黨の兩方から攻撃されるので、とても困つてゐる。蔣介石が南京で軍官學校を開いて教育した學生が六百人ゐたが、それが全部將校になつて今度の北伐に従つたわけさ。それがこの一年半の間に殆んど戦死してしまつて、現在生き残つてゐるのは二十五名位のやうだ。僕だつて何時どんなことがあるかも知れないと覺悟はしてゐる。それに僕の首にはこれでも大枚の懸賞金がついてゐるんだぜ。』

Sは強ひて元氣さうな高笑ひをしたが、引つづく心勞と長年の客舎の生活から來る疲勞は流石に蔽ふことが出來なかつた。如何にも芯が疲れてゐるやうで氣の毒だつた。懸賞金といふのは、張作霖の方でSを捕へる爲に出してゐるので、その爲Sは始終旅舎を變へて隠れてゐなければならぬやうだつた。

『北伐が成功すれば、山東省の問題では、僕も少しは必要な人間になるんだ



が、この儘ぢやとてもやり切れない。蒋介石も盛に止めるのだが、本當に身體が續かないんだから、僕はどうしても日本へ行くよ。實のところ早く北伐が成功したら、一度奉天へ歸りたい。あの事件以來、一度も奉天へは行けないので、ずつと兩親にも會つてゐないし。父母のことを思ふと流石に少し暗然とするね。』

とSは淋しさうに笑つて見せた。最後の二時半のランチにはもう間に合はないので、二人で自動車で、朝ひどい目に會つて上陸した地點へ行つて、舢板で船へ歸りついた。別れる時にSは、「今度君が歐羅巴から歸る時は、是非シベリア經由で來給へ。その頃迄には、僕も奉天へ戻つてゐるから、一つ大いに御馳走をするよ」と言つてゐた。

Sとはその時別れた切りである。倫敦の下宿に落付いてから、Sから二三度手紙が來た。やつと日本へ行つて少し休まうと思つたら、色々事件が突發するので、又支那へ戻つてゐるといふことであつた。

その最後の手紙には、愈々北伐も成功したので、これから急に忙しくなる。今度は某方面に非常に重大な用件を帯びて行くが、今度の用件はなかく困難な仕事で、それに非常な危険が伴ふことを覺悟してゐる。或はこの手紙が君に上げる最後の手紙になるかも知れないといふ意味のことが書いてあつた。

その手紙を見て、驚いて、餘り無理をするなど言つてやつたのであるが、其の返事は遂に來なかつた。そしてそれ以來もう十年餘りになる。どうもあのSの最後の手紙が本當に最後のものになつたらしいと今では思つてゐる。

上海でSの話を書いた頃は、丁度國民政府が排英騒ぎに没頭してゐて、従つて排日問題は下火になつてゐた。その直後の濟南事件で排日騒ぎが又大きくなつたものの、とにかく此の話を書いてゐた頃は、國民政府が今のやうな無謀な



抗日政策をとらうとは夢にも思はなかつた頃である。それで軍官學校出の青年將校たちや、S等の革命的な純情には同情の感を持つてゐた。

此の頃になつて、新聞で、蔣介石がこんな大事態を惹き起して支那の國民に塗炭の苦しみを與へながら、その一門の私財は依然として莫大なもので、外國の銀行にそつくり預けてあるといふ記事などを讀むと、Sの血もその銀の一部になつてゐるのだらうと思つて、しみじみSには氣の毒なことだつたといふ氣がする。(昭和十四年三月)

## 第二部



語呂の論理



先年北海道で雪の研究に手を付けた時、日本の昔の雪の研究として有名な、土井利位の『雪華圖説』と鈴木牧之の『北越雪譜』とを何とかして手に入れたいものと思つて、古書の専門店の方へも聞き合せたことがあつたが、折悪しくどうも手に入らないので困つてゐた。ところが、何思はずさういふ意味のことを雑文の中に書いておいたら、早速それでは私のところにあるものを御頒けしませうと言つて下さつた人があつた。

一人は秋田の人で、文久二年大槻磐溪先生の重刻になる『雪華圖説』が送られて来た。もう一人は九州の人で『北越雪譜』の七冊揃ひの大變保存のよい本が幸運にも手に入つたわけである。もつともその後間もなくこの『北越雪譜』の方は



岩波文庫に出て、手軽に誰にも手に入ることになったのであるが、かういふ本もなか／＼面白いものである。『雪華圖説』の方は案外立派な研究で、天保時代の日本の自然研究者の仕事も、よく見ると、色々學ぶべき點があるといふ意味で特に私には興味があつた。『北越雪譜』の方は、昔の雪國の生活の記録が澤山集つてゐるといふ點で科學的に見ても大切なものであるが、その一番大切な所は、當時の人々の雪害防止策と、現代の東北や越後地方の人々の探つてゐる對策とが、殆んど同じものであつて、現代日本の文化的或は科學的の施設が、これ等の地方には殆んど及んでゐないといふことが分る點にあるのである。

もつともさういふ話は、雪國出の政治家などが云はれた方が適切なのであつて、私にとつてもつと面白く思はれたのは、『北越雪譜』の中の理論的説明に用ひられてゐる一種の論理學であつた。徳川時代といつても、天保の頃にもなれば、もう西洋の學問も入つてゐるので、特にその頃の先進者たちの頭の中に

は、西洋學的な物の考へ方即ち現代のわれわれの物の考へ方が充分はひつて來てゐたやうである。例へば『天地或問珍』のやうな本の中の自然現象の説明に用ひられてゐる廣い意味での論理學は、現在の自然科學に用ひられてゐるものと、その骨組に於ては先づ同じものと見て差支へないやうである。ところが、此の『北越雪譜』の著者鈴木牧之翁は、越後の鹽澤の商人で、時々商用で上京した時に當時のいはゆる文人雅客と交りを結んでゐたものの、その全生涯は殆んど越後の雪の中で送られたものと見て差支へない。

かういふ北陸の片田舎で育ち、西歐の自然科學的な物の考へ方からすつかりかけ離れて生長した人の持つてゐる「自然科學」の一面を見るためには、或は『北越雪譜』のやうなものが案外良い資料になるのかも知れない。そして私にはこの『北越雪譜』の中に出て來る論理が、何となく純粹に日本的或は東洋的なものといふ氣がして大變面白かつた。



第一節は「地氣雪と成る弁」であつて、天地の間に、三つの際へだてがあつて、地に近い温際から地氣が昇つて行つて冷際に到つて、温かなる氣が消えて雨や雪になるといふ話が書いてある。この話は、その中に用ひられてゐる術語と温度と熱の概念とを訂正さへすれば、すつかり現代の科學の説になるのであつて、従つてその骨組だけを見れば、かういふ考へ方は現代科學と同じ仲間のものであらう。もつとも牧之翁自身も、「是余が發明にあらず諸書に散見したる古人の説なり」と云つてゐるのであるから、此處では問題にすることもなからう。ところで、牧之翁の論理學が躍如として出て來るものは、もつと地方的の現象の説明である。例へば、「初雪」のところには次のやうな一節がある。

……そも／＼越後國は北方の陰地なれども、一國の内陰陽を前後す。いかんとなれば天は西北にたらず、ゆゑに西北を陰とし、地は東南に足らずゆゑに東南を陽とす。越後の地勢は、西北は大海に對して陽氣なり。東南は高山

連りて陰氣なり。ゆゑに西北の郡村は雪淺く、東南の諸邑は雪深し。……

此の文章の中に用ひられてゐる陰陽の考へ方は勿論支那のものであらうが、それよりももつと興味のあるのは、此の片鱗の中に現はれてゐる論理であらう。先づ初めにこの中に用ひられてゐる「ゆゑに」を色々に考へて見たのであるが、私にはどうも分らなかつた。もつとも「ゆゑに」ばかりではなく、肝心な定理か假説になるものといふのが此の場合は、「天は西北にたらず」「地は東南に足らず」といふのらしいのであるが、それが後の越後の地勢とどう連絡してゐるのか、又かういふ假説がどうして必要なかがなかく／＼了解出來なかつた。勿論論理自身を今問題にしてゐるのではなくて、かういふ風に説きすすめて行く方が物事が分り易かつたらしい牧之翁の頭の作用が、現代の私たちには呑み込めないのである。結局、これは「語呂の論理」とでもいふべきものであらうといふ結論に達して、さつさと次へ読み進むことにした。



ところが、仙臺で小宮さんの御宅を訪ねた時に、丁度水曜の面會日に當つたことがある。その席上で何氣なくこの語呂の論理の話をしたら、同席の長谷川君が大變面白がつて、「さういへば、北越雪譜の中の雪中の虫のところ」に『金中猶蟲あり、雪中蟲無んや』といふのがありますね」といふ話をしてくれた。私はうつかり読み通つてゐたので、歸つてから早速探して見ると、成る程ちやんとあつた。そして、語呂の論理の例としては、この方が簡潔で良いので、其の後には屢々この方を借用することにした。

「雪中の蟲」の説はなか／＼の傑作である。凡そ銅鐵の腐るはじめは蟲が生ずる爲で、「錆は腐の始、錆の中かならず蟲あり、肉眼に及ばざるゆゑ」人が知らないのであるが、これは蘭人の説であるといふ説明があつて、その次に『金中猶蟲あり、雪中蟲無んや』といふのが出て來るのである。

『雪中蟲無んや』の話は、その時は大笑ひになつて濟んでしまつた。そして西

洋の自然科学風な考へ方の洗禮をまだ受けてゐない頃のわれ／＼の祖先の頭の中をちらと覗いたやうな氣がして大變愉快であつた。ところが其の後よく注意してゐると、この語呂の論理は案外現代にも色々な所ですました顔をして通用してゐるといふことに氣がついた。特に驚いたことには、ちやんとした現代科學の學會の討論などにも、時々『金中猶蟲あり、雪中蟲無んや』と全く同じ論理が出て來ることがあるのである。もつともさういふ論をする人を、徳川時代の頭の人と言はうといふのではない。恥しい話であるが、現在の我國の科學界は世界の水準を抜いてゐるやうに新聞や雑誌などに時々書かれてゐることもあるが、それはどうも餘所眼の話で、本當に内部に入つて、その學問的地位を冷靜に考へて見ると、まだ／＼日本の學問は世界的の水準に達してゐないと私には思はれる。少し極端に云へば、外國に柿に種が六つあるといふ論文が出ると、梨には八つあるといふ論文が日本で一二年後に出るやうな程度のことだ。また可



成り多いのである。それから見たら、語呂の論理でも何でも、とにかく一つの見識を持たうといふのはまだ良い方であるのかも知れない。

此の三四年來、日本の氣候醫學の方面で、空氣イオンの衛生學的研究が一部で盛に始められた。或る大學の研究室では、陰イオンが、喘息や結核性微熱に對して沈靜的に作用するといふ結果を得て、臨床的にも應用する迄になつてゐた。そして陽イオンはそれと反對に興奮性の影響を與へるといふことにされてゐた。ところが他の大學の研究では、イオンの生理作用は、陰陽共に同一方向の影響があつて、只その作用の程度が、イオンの種類によつて異るといふ實驗的結果が澤山出て來た。それで學會で、これ等の二系統の論文が竝んで發表された時には、勿論盛な討論が行はれた。或る理由でその席上に連つてゐた私は、その方面とはまるで専門ちがひなので極めて暢氣に構へて、その討論を聞いて面白がつてゐた。その中にはかういふのもあつた。「陰イオンが沈靜的に

働くといふことは、既に臨床的にも澤山の例に就いて確證されてゐる。これは實驗的事實である。それが事實とすれば、陽イオンがその反對に、興奮的に作用するといふことも亦疑ふ餘地がない」といふ議論が出て來たのである。これなどは、正しく語呂の論理の適例であらう。もつともかういふ立派な學會での討論を『雪中蟲無んや』と内容的に同じものといふのでは決してないが、論理の形式が同型のものであることは認められるであらう。勿論、實際は陰イオンが沈靜的に働き、陽イオンが興奮的に作用するといふ研究結果を得られて、その事實を發表しようとしたのであらうが、それを聽衆に納得させようとした時に、不用意のうちに、われ／＼の祖先の持つてゐた表現形式が出て來たのであらう。かういふ風に見ると、語呂の論理は日本人の頭の奥底に可成り強い一つの思考形式として今も猶殘つてゐるものと見るべきであらう。

かういふ例は、勿論外にも澤山あるのであつて、特に或る種の政治家たちの



議論には、随分激しい語呂の論理が平氣で幅をきかせてゐるやうである。先年  
いつか汽車の中で、かういふ種類の政治家らしい人が、肥つて嚴丈な肩をいか  
らせながら、地方の代表者らしい人を二三人前に置いて、盛に高説をきかせて  
ゐたのを見たことがある。丁度或る大學事件がやかましかつた頃で、その政治  
家は、大學の「研究の自由」について盛に論じてゐるらしかつた。

「いくら研究の自由だからと言つても、ちやんと大學令に、國家に樞要なる研  
究の蘊奥を極めとある以上、（本當はそんなことは書いてないが）國家に害ある  
やうな研究を自由にやるといふ法はないぢやないかね。」

「いや勿論で御座いますよ。どうも此の頃大學の先生も少し圖に乗り過ぎま  
したからね。」

「さうだよ、さうだよ。少し圖に乗り過ぎてゐるんだよ、常識で考へたつて、  
國家から金を貰つて、國家の機關として研究をしてゐるのに、國家に樞要なる

研究をするのは、君、當り前だよ。」

といふ風な話がちよい／＼聞えて來る。かういふ議論は勿論本當過ぎるくら  
ゐ本當のことで、何も議論になるやうな問題ではないのである。もしそれが議  
論になるとすれば、それは語呂の論理の一つの例となるかどうかといふ點が問  
題になる丈けであらう。

此の場合、問題になるのは、或る大學の或る教授が、一つの研究をしてゐる  
として、その研究が國家に樞要な研究であるか否かの判断を誰がするかといふ  
點なのである。従來はそれを大學の教授の判断に任せておいたが、とかく専門  
學者にはさういふ判断力が少いから、例へば監督官廳の適當な地位の人がその  
判断をすることに改めようといふやうな議論だつたら、それは議論になり得る  
性質の話である。「大學は國家の機關だから、國家に樞要な研究をすべきだ」と  
いふのでは、秋晴れの日に今日の良いお天氣だといふやうなものである。



田舎廻りの政治家などが、いくら語呂の論理をふり廻しても、その害は多寡がしれてゐる。しかし責任の地位にある人が、かういふ語呂の論理に耳を傾けたら、その影響は恐ろしい。正統に順を追つて、その間思考の勝手な飛躍がないかどうかを確かめながら考へを纏めて行く癖は、日本人には昔から少かつたのではないかといふ氣がする。それが我國で科學が發達しなかつた一つの理由であり、又『金中猶蟲あり、雪中蟲無んや』といふ風な議論が、一種の諧調的な響をもつてわれ／＼の耳に入る理由にもなるのであらう。現代ではもう西洋風の科學的な考へ方が一部の國民の頭の中には根強く行きわたつたので、さういふ議論を聞く機會も少くなつた。しかしもと／＼二千年の間培はれて來た國民性の癖は、なか／＼急には頭の底から抜けないのではないかといふ氣もする。

もつとも何でも理詰めに物を考へるといふこと自身が良いことであるかどうかは又別問題である。世の中のこととは非常に複雑で、さう一部の科學者たちが

いふやうに、科學的精神ばかりで貫けるものかどうかは私には分らない。案外語呂の論理の方が役に立つことが多いのかも知れないが、少くとも大砲や飛行機を作る方面の基礎になる學問の方では、當分の間は好きでも嫌ひでも西洋科學を神妙に勉強した方が良ささうである。

獨逸では、此の頃ユダヤ人を排撃する爲に、アインシュタインとか、原子物理學の方面の俊秀な學者たちとかを追放して、「獨逸物理學」といふ専門雜誌迄出して、大いに獨逸國民的な物理學の隆興を期してゐる。そして純粹のナチス黨員の學者たちが結束して盛に研究をしてゐる。しかしその結果は公平に見て獨逸の物理學の發展には餘り良くない影響を與へてゐるやうに見える。少くともこの數年來の獨逸の物理専門雜誌に出る論文は、一時にぐつと質が低下したといふのは、専門家の中では一般の評である。しかし獨逸では盛に軍備を擴充して、素晴らしい性能の機械力を得てゐるといふ人があるかも知れないが、此



の種の學問の質の低下がさういふ應用の方面に影響をあらはして來るのは、十年とか二十年とか先のことである。

もつとも私はこの例をわれ／＼の「盟邦」獨逸の政策を悪く言ふ爲に擧げてゐるのではない。物理學のやうな近代工業の基礎になる大切な學問の質の低下を犠牲にしても、國內の民族の血を純化し、その結束を固めなければならぬ立場にある獨逸の要路の人々の苦衷を思ひ、且つそれを斷行してゐる勇氣を讃へることは忘れない。とにかく大戰後のあの窮狀を打破して來た獨逸國民に敬意を表することは當然である。只、物理の専門家以外の人には、「獨逸物理學の勃興」などといふ新聞記事が、何かその學問の大發展を意味するやうな誤つた印象を與へてゐるかも知れないので、その點を注意しておくに過ぎない。

その點になると、われ／＼は誠に幸ひである。民族の血の純化などといふことには何の心配もないのであるから、「日本物理學」などといふものを慌てて作る必要もないし、又幸ひなことには、そんな噂もきかないで濟んでゐる。ところが他の學問の方では、例へば醫學などの方では、此の頃「日本醫學の確立」などといふことが云はれてゐるさうである。専門ちがひのことであるから、その内容は知る由もないが、多分それは、日本人の體質に應じた治療學とでもいふのであらう。まさか日本意識に眼覺めたる醫學などといふのではないと思ふ。獨逸では魚は餘り喰はないが、それは魚が漁れないからで、何も日本でもその眞似をして魚を喰はないやうにしようなどと説く人もなからう。

『天は西北にたらず、地は東南に足らず』といふ風な科學がもし出來たら、餘程面白いものが出來上るにちがひない。尤もこれは少し冗談であるが、それ程でなくとも、現代の自然科學はいはばギリシア人の思考形式から發達した學問であるとはよく言はれてゐることである。東洋の特に我國のやうに長い間比較的孤立して特殊の文化をもつて來た國に、特殊の科學が誕生する可能性はない



ことは無い。しかしさういふ別の科學が出来たら、その應用方面も別に開かれると見るのが至當であるから、それは直ぐに現代の機械工業や軍需工業の方面に、急には役に立たないところの或る別のものになると考へる方が本當に近いであらう。とにかく、今は我國は未曾有の非常時局に直面してゐるのであるから、取り敢へずは、日本意識に眼覺めた科學などに注意を向ける暇はない筈である。それも獨逸のやうに、もつと重大な問題、即ち民族の結束といふやうな緊急問題に直面してゐる國ならば、「獨逸物理學」も亦止むを得ないのであらうが、われわれにとつては、今のところは、西洋科學をもつと取り入れて、猶一層強い機械力を産み出すのが當面のつとめであらう。

ところが極一部の人ではあるが、日本意識に目覺めた科學などを起さうと企ててゐる人の中には、かういふ非常時に遭遇してゐる際だから、特にさういふ問題が必要だと思つてゐる人もある。さうすると今の話とはまるで反對の結論になつてしまふ。誠に不思議なことである。

今の場合に限らず、此の頃の世論の中には、同じ環境にゐて、同じ目的を持つて話をしてゐるのに、結論が兩者まるで反對になつてゐる場合が、外にも澤山あるやうに思はれる。或はどつちか一方が、語呂の論理に陥つてゐるのかも知れない。それだとこれは餘程戒心すべきことである。(昭和十三年十一月)



鼠  
の  
湯  
治



この話は、北大のY教授の研究室で爲された、鼠に湯治をさせる話である。一寸聞くと、少し唐突な話のやうであるが、温泉が外傷の治癒に效くといふ昔からの信條を科學的に調査する爲に、鼠に傷をつけて、それを温泉に浸して、果してどれ位治癒に貢献するかといふことを調べたのだから、別に妙な話ではない。

事の起りは、外傷の自然治癒について、量的の研究は餘り無いので、それを研究して見ようといふのであつたさうである。最初に手をつけたのは、その研究室員の一人の君であつた。先づ澤山鼠を飼つて、その各々に大體一定の大きさの傷を胴の所につけて置いて、その面積を毎日プランリメーターで測るのであ